



Title	『信の哲学』の周辺：幻の最終講義他
Author(s)	千葉, 恵
Issue Date	2024-03-18
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/91325
Type	research report
File Information	202403_Chiba.pdf



[Instructions for use](#)

『信の哲学』の周辺

幻の最終講義他

2024年3月

千葉 恵

目次

はじめに・・・3

The Faithfulness Project 紹介・・・5

幻の最終講義「アリストテレスとパウロ —北のアテネの30年」・・・6

『信の哲学』執筆後の追想(幻の後書き)・・・25

回心記(1998年9月)・・・32

『信の哲学』パンフレット 紹介、推薦文、書評・・・36

上沼昌雄、大貫隆、David Charles、中畑正志、Kevin Flannery、水垣渉、
久下倫生、Zenon Culverhouse

賢者に憧れて—千葉先生に「徳」を学んだ日々 木浪志帆・・・43

アリストテレスの意味論—既知及び未知なものを包括する—
感想 浅香力・・・45

『信の哲学』刊行途上の井村直道氏と上沼昌雄先生からのコメント・・・48

『信の哲学』正誤表・・・61

はじめに

多くの方々の助けのもとで『信の哲学—使徒パウロはどこまで共約可能か—』（北海道大学出版会2018）を上梓して6年が過ぎました。その後いくつかの書評や特集をいただきました。今年2月にシカゴの友人らと動画編集のプロの助けを借りてHPの開設によりThe Faithfulness Projectを立ち上げました。<https://thefaithfulnessproject.org/> 人類に最も読まれた書物の神学的に中心的な個所が2千年間誤訳されてきて、そのインクの染みの形が変わるとき、血の染みが乾くことになるかの挑戦です。

『信の哲学』は言語哲学また心の哲学によるパウロ「ローマ書」の分析とパウロ以後の「ローマ書」解釈の神学および哲学の歴史に対する応答として構築されました。これはいかなる聖書学的、神学的解釈もその言語的な制約（五つの言語層）の枠のなかで遂行されねばならないという基礎的な哲学研究でした。

北大定年退職までの2年間そして登戸学寮寮長となった2020年春からのこの4年間は、『信の哲学』から派生するその応用問題の解明に従事しました。例えば福音と律法の関係、贖罪論、死生観、国家と平和そして山上の説教に取り組みました。『信の哲学』における半世紀の間と解—福音と律法』（『哲学』北大哲学会 2020）、「身代わりの愛の力能」（「方舟」61号（登戸学寮 2021 <http://hdl.handle.net/2115/80314>）。「聖書の死生観—旧約における待望の蓄積から新約の時の満ち足りへ—」（『死生学年報 2022』（東洋英和女学院大学死生学研究所 2022 <https://toyoeiwa.repo.nii.ac.jp/records/1726>）。「平和を造る二種類の正義—南原繁『国家と宗教』を手掛かりに—」（「方舟」63号 2023 <http://hdl.handle.net/2115/87786>）。

登戸学寮においてこの4年間基本的に山上の説教を日曜に講義しましたが、それをもとに初めて福音書について本格的に論じました（「山上の説教における福音と倫理」（「方舟」64号 2024 <http://hdl.handle.net/2115/91150>））。山上の説教におけるイエスの語りの層が四層あり、その根源である福音は宣教する者（イエス）とされる者が同一である自己言及に特徴があります。第二の語りの層は自然事象である光、水、野の百合空の鳥等を媒介にした天と地の連続性の語りです。第三は「悪者」の故に不連続のもとにある聴衆に譬え話による地から天への架橋の語りです。そして第四に「君が量る量りにより量り返される」「宝のある所そこに心がある」等一般的な倫理的原則を引き出しうる語りです。福音は信じることによってしか受容できませんが、他の三つの語りが福音に秩序づけられていると論じました。預言者的な迫害の生の八福においてまたモーセ律法の純化において、山上の説教が展開されますが、信の従順の生を貫いたナザレのイエスが双方をリアルタイムに満たしつつある現場で、憐みがあふれ出し新しい生命の福音を彼の言葉と行いにおいて歴史に刻んでいきました。律法の伝統のなかに自己規制しつつもこの古い革袋を内側から送り破るイエスの生命は新しい革袋である信の律法に注がれると論じました。そこで倫理学を構成する三つの特徴（態勢論、理論と実践の相即性、幸福と祝福）をイエスは満たしています。木は実により知られる善悪因果応報説は信じる者にも信じない者にも妥当する一つの倫理学説として自律的なものとして展開されますが、信に基づく正義の「無償の贈り物」である福音により秩序づけられること、ま

た山上の説教を何よりも喜びの音信である福音として読みうることにより、パウロの神学と両立すると論じました。イエスの説教が善き音信であるからこそ、群衆は喜んでついていったのです。

なお、『信の哲学』第二章のアリストテレス倫理学について展開がありました。「アリストテレスの实在論的倫理学—ロゴスに即して生きること—」『モラリア』第29号(東北大学倫理学研究会2022)。「アリストテレスの神学的倫理学—「神の贈りもの」と「徳の褒美」の祝福による媒介—」『ギリシャ哲学論集』XX(ギリシャ哲学セミナー2024)。自然上の「快さ」を伴う神による「祝福」が今・ここで働(エルゴン)においてあるとき、どんな境遇にあってもその喜びが「幸福(ロゴス(定義)=徳に即した或る種の実働)」の規定を満たすと論じました。幸福とは「或る種」即ち喜びを伴う実働であったのです。また D.Charles 先生への献呈論文集がこの春刊行されます。Reflections on Aristotle's Modal Ontology *Aristotelian Metaphysic Essays in Honour of David Charles* pp.297-318 (Oxford University Press 2024)。これは信の哲学の方法論であるロゴス(「力能」と「完成」の組)とエルゴン(「力能」と「実働」の組)の相補性の基礎理論となるものです。13世紀にトマス・アクィナスが使用したモルベケのラテン訳以来誤訳されており、高校の教科書にも掲載される現実態—可能態の様相存在区分の間違いを代案とともに指摘しています。パウロにおける信と共にアリストテレスにおける存在解釈の中心的な語彙の誤解が解かれることを願っています。途上ですが、The Faithfulness Project が立ち上がり世界に発信したこの段階においてまとめておくことにいたしました。『信の哲学』の理解に何等かお役にたちえますなら幸甚です。

本稿は科研基盤研究C「『信の哲学』の英語版作成を介しての負の知的遺産を克服するパウロの言語と心身の哲学」(2018-2024)」の報告を兼ねています。助成を頂き感謝です

2024年3月17日

千葉恵

(公益財団法人 登戸学寮寮長、北海道大学名誉教授)

The Faithfulness Project (2024年2月)

<https://thefaithfulnessproject.org/>



background dealing with the theological nuances of Romans, he immediately recognized the significance of Dr. Chiba's work.

Over subsequent years of conversation, it has become increasingly clear that the convergence of philosophy and theology in clarifying the meaning of Romans 3:22 has broad implications for Christianity as a whole.

In 2020, as Dr. Uenuma discussed these topics with his son Maurice on a drive through central Illinois, the idea for The Faithfulness Project was born...

Our Team



Kei Chiba, Ph.D.

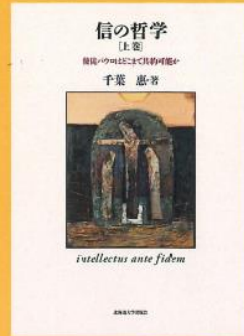
Professor of Philosophy (retired), Hokkaido University, Japan

2014年11月に顧問をしていたクラーク聖書研究会の50周年記念会において創設者の一人の上沼昌雄先生(神学博士)がカリフォルニアから講演にこられました。そこでの出会いから今日まで交流が続いています。『信の哲学』(2018)刊行をめぐりお助けいただきました。その後シカゴ在住の Maurice Uenuma 氏が発案者となり信の哲学を英語により発信する計画がもちあがり、三人を中心に論文や対話の動画等 HP を立ち上げました。以下の URL により閲覧できます。

<https://thefaithfulnessproject.org/>

千葉恵教授
最終講義
+シンポジウム

アリストテレスとパウロ
—北のアテネの30年—



日時：2020年3月7日(土)
午後12時～17時半
場所：北海道大学
人文・社会科学総合教育研究棟
軍艦講堂1階 文6教室

シンポジウム (12:00～15:00)

『信の哲学』はサステナブルか!?

中畑正志 (京都大学教授)

「テキスト・解釈・哲学 —アリストテレスのウーシアー、そしてエネルゲイア」

水落健治 (明治学院大学名誉教授)

「アンセルムスの理性のみによる神認識 — その可能根拠について」

荻原理 (東北大学准教授)

『『信の哲学』における信の根源性をめぐって

—マクダウエルの道徳心理学を念頭に措きながら」

司会 中川大 (北海道教育大学教授)

—— Coffee Break ——

最終講義 (15:30～17:30)

千葉恵 (北海道大学特任教授)

「アリストテレスとパウロ —北のアテネの30年—」

連絡先：千葉恵教授最終講義 発起人事務局 Email: aristot0307@gmail.com (井村・北郷)

幻*の最終講義「アリストテレスとパウロ —北のアテネの30年」(草稿 2020年3月)

1はじめに

(*北郷彩氏、井村直道氏の尽力により本来なら2020年3月7日に最終講義と懇親会が持たれる予定であったがコロナ蔓延のため中止となった)。

本日は本来ならただ消え去るべき身にすぎないはずのわたしの最終講義にかくも多くの方々がお遠くからお近くからお寒いなかお運びくださり、心から御礼申し上げます。「アリストテレスとパウロ」という題でお話させていただきます(懐かしい方々のお顔をみて胸が一杯で感情的になりそうですので、がらにもなく文章を読む仕方で最終講義をさせていただきます)。副題に「北のアテネ」とありますが、英国のエディンバラ大学が北のアテネを目指したことがこの表現の始まりです。かつて北大にこられた英国の「お雇い教師」の先生が北大が東洋の北のアテネになるようにという願いをこめて恵迪(けいてき)寮の寮歌の歌詞に用いたことに由来いたします。この北のアテネに30年も勤めさせていただいたことにただ感謝の思いに溢れます。

赴任したのは1990年、平成2年4月でのことです。その90年の2月にオックスフォードでの博士論文'Aristotle on Explanation: Demonstrative Science and Scientific Inquiry'の口頭試問(Viva)が行われてすぐの着任となりました。入学者たちは団塊ジュニアたちの世代で、彼らにはその後の苦難の時代が控えていましたが、若々しく輝いていました。本日最初のクラス担任であった1年3組の方々が一七人ほどお見えですが、あれから30年の歳月が流れました。ですからあのころの紅顔の美少年、美少女たちも半世紀近くそれぞれの生を紡いできたこととなります。少年老い易く学なりがたしの感をふかめています。ただそのなかで、いくつか私のなかでは大きな発見と思えるものがありましたので、「アリストテレスとパウロ」の研究について振り返りながらお伝えし最終講義とさせていただきます。

「人間とは何と言う珍奇、妖怪、矛盾の主。宇宙の栄光にして宇宙の廃物、真理の受託者にして曖昧と誤謬のドブ。この繯れを誰が解くのか」というパスカルの促しに呼応して哲学を志しました。爾来四十数年がたちます。戦後の復興の努力のもとに築かれた平成時代30年という、戦争なき概して豊かな期間この北海道大学という恵まれた環境のもとに哲学の研究、教育に30年間過ごすことが許されました。学務の日程はほぼ同じで代わり映えがなく、授業をして入学試験や卒業の審査をしてというサイクルを30回繰り返したことになります。ほぼ四年間おつきあひする学生さんたちが七周り半入れ替わり交代していくという安定したというか、単純なサイクルであったかと思えます。

学生さんたちには驚かされることの多い歳月でした。個性豊かなそして若々しいそれぞれの魅力を放っていました。なぜか自然人、山岳部や冒険部の人々には惹かれました。時間の感覚が異なっていたからでもありましょう。また社会的な正義感の強いひとびとも目につきました。論理学の授業では教師の私よりはるかに頭脳の回転速く問題を解いてしまう学生さんたち、情報処理能力、理解が早く哲学の難解な文章をただちに自家籠中のものとしてしまう学生さんたちには驚かされることがありました。他方、とりわけ頭脳明敏とは言えないひとびともいっそう唯一無二の学生さんたちでした。

やはり大学そして哲学の世界は知性のアリーナ・闘技場であり、頭脳の明敏さが称賛され、そうでなければ非難されるところでした。哲学という抽象度が高くとても要求の大きい学問領域において私自身はいつも困惑しながら、歩みの遅いものでありました。少しずつ光明を見出しつつ、認知的そして人格的に学生さんたちのよい模範でありたいという思いの中で過ごしました。しかし、彼らにとって「ああいう者のだけはなりたくない」という反面教師以上のものではありえなかったのではないかと怖れます。

浅学非才の私には或る種の論理的鋭さ(logical acumen)に欠けていることを自覚しています。アリストテレスに見られるように優れた哲学に求められる最も基礎的な才能に欠けていたということです。それゆえにこの30年も基本的に苦闘の日々であったと言えます(ただし振り返れば、ひとの脳は階段のように version up するらしく、その一つは 2008 年頃松尾悠子さんの修士論文で『命題論』と一緒に勉強していたとき、テキストが突然明晰になったことを憶えています)。そのような認知的、人格的限界、制約のなかで私を研究に駆り立て支えたものは歴史の審判を経て、歴史を審判しているでありましょう西洋古典文献の明晰さ、堅固さ、高さそして深さでした。アリストテレスやパウロそしてアンセルムスなどのテキストは常に魅力ある光を放ち、地を這い蹲っているような、愚鈍な私を少しずつ引き上げてくれました。正しく理解したいという思いだけが、テキストの沈潜を余儀なくさせたと思います。

ライフワークの『信の哲学』が二年前に刊行されてからはおおむねテキストへの埋没から抜け出ていわば顔をあげた生活になりました。そこではやはり確かなものに出会うことができず、今魂が少し干からびてしまったことをそして往時のような一切をかけて取り組むことなしには太刀打ちできない真剣さから離れてしまい魂に渴きを覚えていることを告白しなければなりません。それほどに歴史の審判を経たテキストは確かであり喜ばしいものだったことに気づきます。テキストにはそれほど堅固なものがあるのだとすれば、そしてテキストはやはり不十全な人間の産物であるとしたら、そのテキストが伝えようとしているリアリティ、ことがらそのものはどれほどそれ自身において確かなものであるかということに思い至ります。この確かさを讃美したい思いにかられます。

また研究の歴史は甲論乙駁であり、人類が最も読んできたこれらの古典についてもまだまだ貢献の余地があるという思いは研究に志した最初のころから既に明らかでありました。科学技術や医学がこれほどの長足の進歩を遂げているなか、人文学は何かとても怠惰であるように思われたのです。しかし、それは今ふりかえりみますと最も基礎的なテキストの二箇所(アリストテレスにおける存在者の在り方としての所謂「可能態と現実態」の二元的区別(「力能」と「実働」)を媒介する存在様式「完成(エンテレケイア)」)についての無理解、さらにはパウロにおけるピステイス(信)の二相とその媒介の無理解)がひとびとをして甲論乙駁に陥らせ、そして疲れ果てさせ、諦めさせていたのではなかったかとさえ思うのです。

このような事情のなかで古典哲学研究に従事してきました。テキストが堅固であるということは、古典の著者たちは緻密な仕方では壊れないセンテンスを紡いでいるはずであり、分かっただけで誰もが同意できるそのような明晰な議論を展開しているということを含意しています。テキストが解明をめざす世界はその構成に関して一様の仕方において在ると想定され、その解明は少なくともテ

クスト研究にラストワードを与えることができるはずだという思いを抱かせます。換言すれば、あてもないこうでもないというように見える哲学や神学の研究もテキストの解明において適切であれば、これまでの長い蓄積を持つ研究の歴史も単に歴史的な意味を持つにすぎなくなるということをも含意いたしましょう。

ともあれ暗中模索のなか尊敬すべき、未来を担う学生さんたちになんとか肯定的なもの、知性の輝き、思慮深さそして人生は生きるに値するものであることを伝えたいという思いのなかでの日々であったと思います。教師としてはいくつかの失敗事例はありましたが、その都度その失敗を教訓に二度とその種の過ちを犯さないことが当該学生諸君たちへのせめてもの償いであると思い、背負うべき十字架として胸に刻んできました。赦しつつ、赦されつつ一切を正確に知るしかも憐れみ深い審判者にその判断はゆだねることにしましょう。そのようななかで学生さんたちに北大でよかったという思いの中で力強い人生を歩んでほしいという思いだけは堅固であったかと思います。

2 鞆一つもって渡英、修行時代

かつて明治時代にエドゥアルド・フォン・ハルトマンの推薦でお雇い外国人教師としてケーベル先生が東京大学に招聘され西洋古典や哲学を講じました。1893年から最初3年の契約でしたが、7回更新され21年間も哲学や上野の音楽学校でピアノなどを教えました。彼はチャイコフスキーの友人でした。ケーベル先生は1848年ボルガ河畔に生まれ1923年横浜で亡くなられ雑司が谷の外人墓地に葬られました(『ケーベル博士随筆集』久保勉訳編 岩波文庫)。その彼がこう言い遺しています。「哲学は多くを約束し文献学は少なく約束する(philosophy promises a lot and philology promises a little)。そして哲学は多くを約束し少なく与え、文献学は少なく約束し多くを与える」と。若いころ、そのとおりで思っていました。今はこの見解に同意できません。アリストテレスやパウロなど一級の哲学者、神学者はことからそのものを明らかにすべく前置詞ひとつ等閑にできない工夫をこらしギリギリの文章で表現しており、テキストを正しく理解できたときには(そういうことが一体あるとして)、彼らが掴んだものをこれ以外の仕方では表現できないということに納得するにいたります。そのことが分かってからは彼らのテキストにどこまでも埋没することができるようになりました。

私の小さな頭脳や人格では死人の復活や神の存在について直ぐ懐疑にとらわれてしまいました。振り返りますとアリストテレスやパウロのテキストを疑ったことが一度もないことに気がつきました。それは彼我の差があまりに大きいものであることが目の前にあるテキストを通じていやというほど知らされてきたからであると思います。手前にあるテキストに掴まれ表現されていることがらの美しさと堅固さに驚嘆しつづけ、ひたすらテキストを信じ少しずつ理解が進んできたというのがこの30年だったと思います。

『信の哲学』の仕事が終わって一端その外にほうりだされてみると、私は神よりも理性の真理の源である矛盾律をより一層信じそして愛してきたことを知らされた幸いです。この偶像崇拜の事実は衝撃ですが、私は概念に躓く者であり、パウロのテキストに矛盾があるように思われ、彼が無矛盾であったことを証明するのに40年の歳月を費やしたとすることができます。そしてようやく認知的な地平から解放され、人格的な地平が開かれているという思いにさせられています。

私の研究生生活を語るうえでどうしてもそのひとに言及せずにはいられない方がデヴィッド・チャールズ先生です。1985年春にバーンズ先生の招聘状一枚をもってカバンひとつでアリストテレス研究のメッカにまいりました。入国審査で言ってみればお前などこの国にいてやらないといわれ、ロンドンの場末に潜伏しました。イースター開けに移民局にカラフルなひとびととともに長い列をつくりようやくめどが立つそんな漱石言うところの「膝栗毛」の生活でした。しかし、ゼロから始めた英国生活でしたので、何であれ前進は大きな喜びでした。そんなおり、デヴィッドはオックスフォードで私を拾ってくださったのです。爾来35年、家族を除いて誰よりも哲学合宿、研究会などで共に多く旅行し、誰よりも多くアリストテレスその他について議論してきました。いまだに英語論文の執筆ではお世話になっています。先日も彼への献呈論文集の編集段階のうちに、彼はこう書いてきました。I am very pleased to have been able to make a few suggestions as to how to improve the style of your paper, which - as you know- contains (in my view) several interesting ideas which deserve to be widely disseminated. Good luck for the next round of work on this paper.

私の哲学はそしてそれゆえにその後の人生は彼との出会いなしには掛け値なしにナッシングであったといえます。当時の留學生活の一こまを当時日本に送っていた「オックスフォード便り」の一節を引くことによりおつたえしたいと思います。渡英後4ヶ月のところから引用します。

「夏休みに入ってからギリシア人でアリストテレスを研究している大学院生パンタジース・ツエレマーニスに『分析論後書』と一緒に読んでもらっています。先日、「オリュンポスの悪い息子」が、夜の静寂(しじま)のなかで、現代ギリシア語で、7年前私の哲学の出発点となった第2巻1章を朗読してくれました。その美しい朗々たる響を聞いていると、その暗い部屋に何かソクラテスやアリストテレスが舞降りて、彼等と席を共にしているような感動を持ちました。この流浪の徒をこの町の人々は親切にもてなしてくれます。このゾクゾクするほどの学することの喜びを同胞に伝えるべく励みたいと思います・・」。

2 エルスフィールドの丘

「・・8月20日の夜9時頃、本を読んでいると、下宿の呼び鈴がなり、誰かに取りつかれ二階にあがって来られる人がいて、私の名が告げられていました。間もなくノックの音がして「誰だろう」といぶかしがりながら戸を開けると、そこにこやかに立っておられたのは「夏の陣」でおなじみの長身のデヴィッド・チャールズ先生でした。お顔を見た瞬間に、てっきり先生は議論に来られたのだと思いました。と言いますのも、数日前に7月16日の最後の読書会のご親切なご指導に対する感謝とこの夏取りかかっている『分析論後書』の探究論について、或るインスピレーションを与えられ、この書が従来とは違って新たに矛盾なくそれも従来のアポリアを解決しながら読みうるということを書いて、手紙をさしあげたところだったからです。握手をし、狭い部屋にお通しし、向かいあって席についておもむろに切り出されたその晩のご用件は思いがけないことでした。8月の初めにも訪ねてくださったのだそうですが、不在だったらしく、その後は故郷のウェールズで過ごされ、今日お母様とご一緒に帰って来られたのだそうです。おっしゃるには、アメリカに一年出かけるのでエルスフィールドにある先生の家に住まないかというお誘いでした。この流浪(さすらい)の徒にはこのようなご親切をお断

わりする理由はもちろん何ひとつありませんでした。

「今から来ないか」ということで夜の街頭に照らされるカレッジの石の変幻な色彩とドライブを楽しみながら、町の中心から東に数マイル離れた丘の上にある数十人の人口の村エルスフィールドに向かいました。車中でこちらで何もお伺しないのに、先生は「僕の父は神学者だった」とおっしゃいました。お父様はマンスフィールド・カレッジを卒業され炭鉱地の組合教会を牧し、またノッティンガムの神学校の校長をしておられました。先生が16才の時なくなられたのだそうです。かなり長い坂道をあがりきると、木々につつまれた丘の上にある村エルスフィールドに着きました。この周辺の土地は先生の家を含めすべてクライストチャーチ・カレッジの所有物ということでした。車を降りながら「こんな田舎に住むのは初めてです」と申し上げると「田舎の香もするよ」と返され、そういえばどこからともなく田舎の香水が漂い、兎が飛び出すそんなのどかな村でした。その晩は暗くて解りませんが、数十センチの厚さの傾斜の急な茅葺きの屋根と土色のレンガ壁の二世帯用の長い古風な家でした。腰丈ほどの木柵の門を開けると、ぶどう色のレンガのアプローチが石の外壁をぐるりとめぐり玄関に続いていました。玄関の右手には少し高い場所に芝生と哲学者によって栽培されている野菜畑の庭があります。庭の奥にはイタリア風瓦の少し傾いた物置兼塀があります。

「ハロー、ハロー、ママ、恵を連れてきたよ」と大きな朗らかな声で戸を開けられ、白髪の上品なお顔に眼鏡の奥に親しみ深い優しい目をされた老婦人に「恵はルーク(ルカ福音書)を読んでいたよ」と紹介されたものですから、旧約学者ロビンソン教授に教えをうけ、父と夫を牧師に持つ高校の宗教教育の先生をしておられたお母様ともすぐに心通うものがありました。Mrs. チャールズは国の「婦人の会」のウエールズ地方の議長をされ、最近もソ連やドイツに招かれたり、招いたり若々しく活動しておられます。愉快な方で魂の底にずっと入ってこられます。それは常に生にとってもっとも大切なものだけに集中しておられるからであります。代々神学者、牧師の家系でご先祖はマダガスカル島に宣教に行かれ、『聖書』を現地語に翻訳された時の冒険談などに、何か教科書で学んだだけの歴史が生き生きと立ち現われてくる感を持ちます。「ママ」と少し甘えられるディヴィッド先生と「ダーリン」と言って一人息子を誇りにし、息子の働きすぎを気遣う母一人子一人の家庭の暖かきのなかに包まれて、イギリスにまいりまして初めてホームの香を味わい心満たされる思いでした。

翌日もひょっこり6時頃先生があらわれて、アリストテレスの話しをひとしきりしたあとで、再び夕食に招いて下さりました。明るいうちに散歩をしました。近くの16世紀の古めかしい教会はステンドグラスだけが光輝いてひっそり静まりかえっていました。..それから先生のランニングコースに行きました。先生は22才の時からクライストチャーチで教鞭を取られたとのことですが、学生時代はラグビーの選手で峻足ウイングでいらしたそうです。小麦畑の広がる丘の頂上までは家から1、2分でしたが、そこは360度のパノラマの眺望でした。西の平地には幾多の尖塔が天をさし、町全体をぐいと引き上げているような感じをさせるオックスフォードの緑濃い街並みが見えます。そしてはるかに緑の牧草地と森、畑につつまれた丘のレンジがこのエルスフィールドを中心にして円を描いたようにめぐらされていました。また隣村の散歩コースにも案内されました。先生の昨年夏の存在論と倫理学がひとつとなった著書はこの大地と広やかな光景から生まれたとのことでした。その晩もロゴスと母上の手料理の饗宴にあずかりました。..先生の書斎は石畳のテラスに通じています。パンタジー

スに「オックスフォードに学者は多いが、哲学者は少ない。デヴィッドはその数少ない哲学者の一人だ」と言われる37才の若き哲学者デヴィッド・チャールズの書齋で勉強すれば、ミネルヴァの女神の靈気が残っていて、鈍い頭脳も冴えるようになるのでしょうか。..この地の人々は惜しみなく教え、与え心にとめられません。先生はこの風来坊に住まいさえ提供して下さいます。私は例えば東南アジアからの学生に何かこのような配慮をしたことがあるかを自省する時、忸怩たるものがあります。人の暖かさにふれて、はじめて自分もそのような人間でありたいという思いが湧くものようです。..」

[1987年にとびます]。

デヴィッドとのチュートリアルも頻繁にもたれています。ある日の日記にこうあります。「(1987年)10月30日(金)昨日はまたデヴィッドと素晴らしいチュートリアル。こんな幸いな日々はない。プロ意識というか、仕事というものがこんなに楽しいということほど素晴らしいことはない。云々」。確かあの日は、秋の日没は早くすでに暗くなっていた5時頃から私の新しい説の吟味にとりかかりました。哲学的センスが磨かれるというのは、何か平凡に見える事柄やテキストのなかに、普遍的な問題を見つけ出す能力を身につけることと言ってよく、デヴィッドの忍耐強い指導のもとに彼の目のつけどころを吸収していくにつれ、自分でも次から次へと問いを見つけることができるようになりました。かつてはテキストの不整合その他でいきずまると困りはてましたが、今はそれを単に文献学的な問いとしてではなく、有益な哲学の問題としてより普遍的に興味深く捕えることができるようになり、問題を見つけるとかえって喜ぶようになりました。世界は問いで充ち充ちています。

その日は7時になっても決着がつかずに、夕食をはさんでその続きをすることにしました。ガウンを引っ提げてデヴィッドはハイテーブルへ、私はローテーブルへと向かいました。私は黙々と次戦の作戦をねりながら食べたので味がほとんどわかりませんでした。ふと目をあげると、ハイテーブルのろうそくの背後にデヴィッドの謹厳な顔が陰影のなかに浮かんでいました。目があい、お互いに無言のうちに頷きあいました。彼は恰も「恵、腹ごしらえができれば、今度こそ最前線を突破するからな」と目くばせしているようで、武者振りが走りました。その日は結局10時半までかかりました。その後議論に関わるボルトンの論文をコピーすべくコピー室に行きました。彼のところには誰が今何に取り組んでいて、ここがネックになっているとか、多くの情報とともに、手稿の段階で多くの論文が送られてきます。すると、独身でカレッジにお住まいのブラウン牧師が賛美歌かなにかのコピーにあらわれ、「あれ、ハードワーカーが二人いる」と言いながら入ってきました。デヴィッドが「先にするかい」と聞けば、彼は辞退されるので、今度は私が「私たちのは地にかかわることで、あなたのは天にかかわることですから」と誘うと、デヴィッドが「そう、より大事なことから」と受けられ、和やかな笑いが夜のカレッジにこだましました。

これが私のイギリスでの学生生活のひとつです。

3 哲学の背景にある動機づけ

ものごころついたころから家庭環境もあり神学的問いが私の心を占めていました。詳しくお話するいとまはありませんが、それを解くためにはアリストテレスから始めねばならないと思い、法学部の3

年生のときに哲学に向かい今日にいたります。神学的な問いというより、自らの罪との格闘と言ったほうがよいかもしれません。ハムレットの一節を引用することをお許してください。オフィリアに尼寺に行けと別れを告げるその場面です。

Hamlet: You should not have believed me; for virtue cannot so inoculate our old stock but we shall relish of it ... I am very proud, revengeful, ambitious, with more offences at my beck than I have thoughts to put them in, imagination to give them shape, or time to act them in. What should such fellows as I do crawling between earth and heaven? We are arrant knaves, all; believe none of us. Go thy ways to a nunnery. (俺のことなど信じてはならなかったのだ。古い持ち合わせに美德を接ぎ木することはできず、親木の穢れを賞味するであろう。・・俺は自惚れで、執念深く、野心家だ。それにもまして衝動の赴くまま、とっさにどんな無法をしでかすか知れたものじゃない。どうしでかすか思考を巡らす暇も、それらに形を与える想像を働かせる暇も、いつ実行するかその見境もなしに。地と天のあいだをのた打ち回っている俺のような輩は何をすべきだというのか。われらは、みな、名うての悪党なのだ。われらの何人たりとも信じるな。尼寺へ行け・・)。 (W.Shakespeare, Hamlet Act III ,ScI) 。

本日は罪の問題について論じることはできません。ここではひとそれぞれに与えられた与件(given)ないし制約、そしてタレントについて言及します。電気が磁力であることを簡単な実験で見つけた老マイケルファラデーはそれを数式化したケンブリッジの若き異才マックスウェルに「私でも実験できるように、このヒエログリフの暗号を解読してください」と懇願しました。電磁気学は彼ら二人のそれぞれのタレントの相互作用のなかで生まれました。ひとにはそれぞれタレントが与えられているのでありましょう。よき教師は各人のタレントを見出し、それを引き出すことのできるひとでありましょう。私を哲学にいざなったタレントはつきつめると苦悩ではなかったかと思えます。学生時代に友人たちは或るひととの対比において、「千葉は悲劇的に見えるが実は喜劇ではないか」それに比し「誰それは喜劇的に見えるが・・」と形容していたことを思い出します。「いずれの行も及び難き身なれば、地獄ぞ一定住処ぞかし」の心境は青年時代の私の基本的な感覚であったと思えます。今思い返しますと、子供の頃日曜学校で聞かされた山上の説教の「天の父が完全であるように、君たちも完全であれ」に見られるように、良心・共知の相手方がイエスの言葉であったということが、あまりの彼我の差に苦悩させるに十分であったのではないかと思います。それだけに留めます。その背後の問いが『信の哲学』の原動力であったということだけをお伝えします。

4 アリストテレス研究のブレイクスルー：ペケレット湖畔にて(1997年10月4日)

De nobis ipsis silemus (われら自らのことについては沈黙する)。これはカントの『純粋理性批判』序文の Francis Bacon の言葉ですが、これを自戒としつつも、この30年の小さな営みをふりかえることをお許しいただきます。この30年はアリストテレスとパウロの研究にほそほそながら従事したと言えます。二年前のこのライフワークに至る私の研究生活にとって大きなブレイクと言うべきものは1997年10月4日と1999年8月15日にえた二つアイディアに遡ります。最初のは秋の柔らかな陽射しのなかでの散歩のときのことでした。その前日自宅近くのペケレット湖畔を数時間熊の

ように落ち葉踏みしめ彷徨いましたが、突破できずに帰宅しました。翌日促されるように再訪し旧石狩川の雄大な三日月湖(茨戸川)に面した切り株に腰をおろしておもむろにアリストテレス『形而上学』のテキストを開けたとき、*to ti ēn einai*(「何であったか(本質)」)という字句が目飛び込んだ瞬間にえたものです。「あっ、ソクラテスの「何であるか? (*ti esti*)」の問い直しだ」と叫びました。彼の哲学全体にとっても基本的であり中心的な概念「本質」に関する一瞬の閃きでした。テキストをポケットにいれて「後は美しく書くだけだ」と独り言を言い、畦道をぬけて家路に急いだことを思い出します。その視点から『トピカ』を読むと次々に隠されていたものが明らかになりました。主語と述語の連関という哲学に最も基礎的な言語分析の作業にその後長く従事しました。

アリストテレスは『トピカ』において問答ないし議論の吟味の技術として弁証術(*dialektikē*)を展開します。これは或る立てられた命題を吟味すべくプロとコントラの議論を弁証術的推論として提示するのです。科学的知識をもたらす、知識的推論としての論証は必然的な次元で遂行されるのに対し、吟味の推論は通念、思いなし(ドクサ)の次元で遂行されます。例えば、「すべての快は善である」と「すべての快は悪である」という論争があったとし、前者の大前提となる蓋然的な通念ないし思惑は「すべて追求すべきものは善である」を、その否定の前提としては「すべて過剰をもたらすものは悪である」が提示され、快は追及すべきものか過剰をもたらすものかとして小前提で提示され、結論の対立が得られます。

このように弁証術的实践(アリストテレスはこれを副詞で「ディアレクティコース」と呼びます)は議論の吟味をドクサ(思いなし)の次元で遂行されますが、実は弁証術の理論は言語哲学として厳密に構築されていたのでした(アリストテレスはこれを「ロギコース(形式言論構築術上)」と呼びます)。従来、弁証術の实践と理論が判別されなかったため、たとえば「蓋然的な弁証術に基づき厳密な存在の学としての第一哲学が導出されるか」などの非アリストテレス的な問いが立てられてきました。彼はソクラテスの「何であるか?」への可能な応答を相互に排他的にそして汲み尽す仕方主語、述語連関の厳密な理論を構築していたのです。「本質」を意味表示する定義形成句はその「何であるか?」に対する成功した場合に満たされる「そのもの自体」を表現していたのでした。他の、固有性や類そして付帯性は相互に排他的ですが、適切な応答となりません。例えば、「勇気とは何か」が問われ、將軍ラケスはその答えは容易だとして「戦場で後退しないことだ」と応えます。しかし、ソクラテスはそれは臆病で足がすくんでしまって後退しない場合も含まれるとして、勇気に帰属したりしなかったりするものは偶然的な付帯性だとして退けます。彼はそこで再度勇気の何であるかを問いますがそこで問うていたのは「そもそも一体勇気とは何であったのか」と厳密な同一性、そのもの自体を問い直していたのです。ギリシャ語では過去表現が用いられますが、日本語でも犯人だと思っていたひとがそうではないことがわかったとき、「一体君は何だったのか」と問い直すことと並行的です。本質は同一性を成功裡に捉えた場合の形式的な概念で、これは因果論的な概念である形相などにより充足されるべき *place holding variable* (充足されるべき場を確保する記号)の位置づけを与えられます。

このように四つの候補はプレディカビリア(述語づけ可能なもの)と呼ばれますが、主語と述語の同一性をめぐる分析が『トピカ』でロギコースつまり形式言論構築術的に遂行されています。それ

を基礎に述定(カテゴリー)と呼ばれる主語に対する述語の述べ立ての理論が構築され、言語次元における語句の意味の獲得と述べ立てを介した指示の理論が展開されます。これが「ロギケー」と呼ばれます。アリストテレスは Logic(論理学)の創始者です。論理学とは前提から結論が必然的に導出されるそのような必然性を確保する形式的な組み合わせの研究です。彼はこの生成流転する世界とは別に論理空間を独力で切り開いたのです。彼は後に「この研究についてはこれまで何ら見るべきものがなかった」と回想しています。論理学は最初三つの項と量(全称 特称)と質(肯定、否定)の組み合わせで切り開かれています。のちには拡張されていきますが、論理学は厳密にロギコースに形式言論構築術的に構築されたのです。同様に、述定の理論としての範疇論さらには存在者の類の理論すなわち存在論の基礎もロギコースにつまり他のいかなるものにも基礎づけられない最も確かな原理である矛盾律に基づき、確かなロゴスが積み重ねられていきます。

これはその後の哲学の歴史で蓋然的な経験に依存しない確かさを求めて、超越論的とかアプリオリさらには分析的と呼ばれるものと親和的です。しかし、矛盾律に基づくロギコスの議論は演繹的推論や分析命題より広く、アンセルムスのロゴスの力即ち理性のみ(*sola ratione*)による神の存在論的論証は神が今ここで働いているという意味において存在しなければならないという存在主張(*asseritur*)がなされ、これもれっきとしたロギコスの議論です。アンセルムスは矛盾律を否定する愚か者だけが神はいないと考えると主張しています。私にとりましては「本質(トティエーンエイナイ)」の理解がその後の哲学的思索の原動力となったといえます。

5 パウロの意味論研究の始まり

二番目のものは1999年8月15日、夏の暑い夜自宅で、文語訳で「ローマ書」を読んでいたおりに起きました。パウロが「神は彼らを恥ずべき情欲に引き渡した」と報告するとき、「恥ずべき」により当人がどう感じているかが、まず神にその語により理解されていることがらが指示されているはずだと気付きました。神はギリシャ語に対応する言語使用者であり、語彙の理解を持ちそして認知的に十全な神はその理解において神の前の人間現実そのものを把握しているということに気付きました。これは先のように天啓というのではなく、ああそうなのだという当たり前のことに気付いたという感覚でした。これは私のパウロ研究の行き詰まりを打開するという予想を伴い、一気に視界が開けたそんな感覚を持ちました。神の前の実在とひとの前の実在の分節と総合の意味論的分析の歩みが始まりました。

この二つの経験はアリストテレスとパウロ双方のヌースがヒットしていたものに私のそれがヒットし追体験したものであることを願うことができますが、この間十数年、困難に出会うたびにこの二つの特別の経験に立ち帰り *hunch* を信じ続けました。今から思えば、最初の発見に基づく『トピカ』における本質をめぐる主語と述語連関の二年におよぶ言語分析が第二の気付きに繋がったのだと思います。やはり哲学の訓練はアリストテレスのように「オルガン(道具)」の習得から始めることが必要なことだと思います。二つの洞察は言語哲学から様相存在論に至る今日までの私の思索を支えました。さらに、その準備として1985年春の出会い以来 David Charles 先生の十数年にわたる思索の現場に立ちあい学ぶことができたことがあったと思います。いみじくも先生の思索の結

晶は二千年に *Aristotle on Meaning and Essence*(Oxford 2000)として出版されました。

四半世紀のあいだ異国の母のように慕った David の母君 Mrs. Elizabeth Charles(1910-2008)は私が「ローマ書」に入れあげているのを見て教えて下さった言葉があります。彼女の先生の聖書学者 Wheeler Robinson 教授がいつも 'Today Romans, tomorrow Romans' と言っておられたというのです。これは忘れられない言葉となりました。私の場合は 'Today Romans, tomorrow Aristotle' でしたが、実際パウロが伝える人間にとって究極的な事柄がアリストテレス研究を促し、アリストテレス研究が進展するたびに、パウロが新しく読めるようになるということを経験してきました。『信の哲学』はその果実です。

6 「本質」と「発見的探求論」についての英語論文

本質の言語分析が次第に形を取り出して、その間 British Academy と日本学術振興会の共同研究で 2005 年秋から一年 Oxford に滞在したおり、David Charles 先生は私に「本質」についての論文出版のオファーをくださいました。その後もチャールズ先生との議論が続き、'a serious concern' や 'you fiddle..'等の真剣な批評のなかで困難を一つ一つ乗り越えてゆきました。アリストテレスのように優れたテキストについては最初のアイデアが正しければ、その後の思考は確実に前進するものであり、そして端的な同意にいたるものであることを経験しました。もはや学生と教師のあいだのではなく、真剣に哲学する者同士の論文執筆にむけての数年にわたる議論は私の生涯の宝です。2008 年に 'The paper is really good and deserves to make an impact' とメールでコメントを頂き、ようやく一人前になったという感覚を持ちました。

発見から十三年かかりましたが、*Aristotle on Essence and Defining-phrase in his Dialectic* として先生が編集した *Definition in Greek Philosophy* (Oxford 2010)において出版されました。その間の思考の展開は 1997 年秋の先の思いつきに基づいて一気に一書となった拙著『アリストテレスと形而上学の可能性—弁証術と自然哲学の相補的展開—』(2002)第三章と 2010 年の論文との相違に如実に見出すことができるであります。基本的なアイデアは変わりありませんが、言語哲学としてはるかに実りある展開が遂行されました。論文はベルリン、オックスフォード、ラトガス、アテネ等で吟味され仕上げられてゆきました。共同研究を通じて恣意性が完全に拒否される揺るぎないサトルな世界を見出したのだと思います。アリストテレスの叡知(ヌース)がヒットしたものを追体験し、世界がそれ自身で確かなものであるということ、ただそれだけで喜びでした。

この仕事はアリストテレス哲学の基礎的な問題であり二千年謎の問題であっただけに、反響を呼び多くの書評や研究書また電子版 Stanford Encyclopedia 等での引用がなされ今日に至っています。「本質」については C.Arpe は「かつてポーニッツがアリストテレス哲学の心と呼び・・彼の哲学の最も困難な部分」(*Das ti ēn einai bei Aristoteles*)と述べ、R.Smith も「最も困難で争われた論点の一つ」(*Topics I&VIII*)と主張しました。また E.Anscornb は言います。「これらの構成 [*to ti ēn einai*]はまったく尋常ならざるギリシャ語である。・・それらの起源については思弁のことがらに属する。ひとは、それらが何を意味しているのか、いかに機能するのかそして一般的にそれらの核心は何であるのかについて心を決めることなしにアリストテレスを理解することを望むことはできない(One cannot

hope to understand Aristotle without making up one's mind ..)](*Three Philosophers*).

ソルボンヌ大学のD.Lefbvre氏の書評の一部を紹介することをお許してください。「アリストテレスに関しては、千葉恵の論文が古代研究者たちの注意を引きつけた、なぜなら著者が敢然と取り組んでいるものは(ひとは「遂にやった」或いは「また(新説)か」と言うであろう(Enfin ou encore une fois dira-t-on)) 翻訳不能という評判の表現 *to ti ēn einai* の正確な意味についての刺すような問いだからである。・・理論上の主要な進展(Le progress majour theorique)は、アリストテレスが項(*horos*[定義形成句])の固有な意味において、定義をまたは *definiendum*(被定義項)の本質の表現をただ表現 *to ti ēn einai* のみに制限すべく、プレディカビリア(述語づけ可能なもの)であるところの定義的(*horika*)という諸表現を区別しているその様式に存する。・・」(*Revue Philosophique de Louvain* 110(1), pp.169-172,2012)。

本質はとても基礎的な概念であるだけに、その後多くのアポリアが解けるという感覚のなかに入ります。しかし、ここで言及しておかねばならないことがあります。1997年以降のアイディア以来『トピカ』の研究は進展していましたが、2006年にデヴィッドから論文執筆のオファーをうけたとき1巻8章と9章がまだ解けていませんでした。解けるという感覚のなかで帰国しましたが、博士課程にはいったばかりの北郷彩さんに解けるはずだという思いのもとに彼女にプレディカビリアの導出についての問いを提示しました。彼女はご自身の研究課題としてそれを引き受け2006年から7年にかけて8章の四種のプレディカビリアの相互の排他性を証明されたのです。これは驚きであり、またなんとも感謝すべき共同研究でした。それを基礎に9章のカテゴリー論(述定の理論)が解けたのです。ですから、北郷さんの解明がなければ、もしかすると『トピカ』研究は本質どまりで、述定の理論に至らなかった可能性もあったのです。先ほどのような書評ができることはなかったかもしれないのです。歴史のなかで私個人では解けなかったかもしれないと思うと、ぞっとしてしまいますが、このように歴史はひとつひとつの協力のなかで展開していくことをリアルに学習しました。翻って、1997年秋何者かに促されるようにペケレット湖を数時間彷徨った翌日にもういちど行く、そのようなことがなかったら2千年解けなかったように、私の30年の北のアテネにおける生活においても解けず、ほとんどいかなる研究上の貢献なしに終わったかもしれないと思うと、ぞっとします。この30年間はいつも戦々恐々薄氷ふむが如しの日々でした。

また2010年3月Christopher Shields氏が北大に講義にこられたおり、初代校長クラーク先生の胸像の向かえにある築百年の木造の古河講堂にある私の研究室で本質の論文の校正刷りを読む機会がありました。彼はそれを読みながら「この難しい問題について、こんなにクリアに書けるのか」と驚きました。その晩北大でのすべての日程を終えて二人で茨戸川河畔で夕食をとりながら彼の編集する *Oxford Handbook of Aristotle* (Oxford 2012)にオファーくださったのは僥倖以外の何ものでもありませんでした。それにより私の修士時代から博士論文に至るまで長い間取り組んだ『分析論後書』の研究の最後の段階におけるブレークを含め大きく改善した最終版が'Aristotle on Heuristic Inquiry and Demonstration of What It Is'として目の目を見るに至りました。これもありがたい書評をいただきました。

Lloyd.P.Garson は拙稿のこの帰納と演繹の同時性の主張に対し次のように書評しています。「それら[ハンドブックの諸論文]は一様に高い水準のもの(a high quality)である。というのも、たいいていの場合著者たちは、このようなプロジェクトにまことにふさわしく、明確に論争の舵取りをしている。ここではそのその視点と結論について私がとりわけ思考喚起的とみいだす論文について短い論評を提示すべく自らを限定する。千葉の「アリストテレスの発見的探求と何であるかの論証」は注目すべき主張で始まる。アリストテレスの論証理論は「事物・事象の因果論的知識を獲得する一つの様式として」展開されている(171)。論証的推論の標準的な説明は「非拡張的(non-ampliative)」である、即

ち、結論は前提に含まれているものよりも多くのものを含まない。この特徴がそれを帰納的議論から分離しているが、そのとき避けがたく帰納は蓋然的なものであること必然的である。もし科学的推論が発見的探求を構成するものたりえるなら、それは確実なもの即ち論証的なものそして同時にさらに何か知識を前進させるものでなければならない。いかにこれがそうでありうるかの千葉の議論は「成功した論証は世界に組み込まれた説明的な構造を反映しており、その発見は発見的論証的探求の対象である」ということを論じるものである(177)。この探求は「論証を把握することをめざしている」即ち、実体の本質〔SにとってSであることは何であったか〕の定義と実体が所有する属性のあいだに説明的な連関を見ることをめざしている。千葉は本質の発見的追跡は「ソクラテス的」「何であるか」のアリストテレスの版であると論じる(185)。千葉は、「アリストテレスはもしひとがその根拠が判別されるものであるものごとの本質を把握することができるなら論証をもつことの必然性を確立する」と結論する(196)。千葉が洞察的に注記するように、アリストテレスはひとが推論の前提に「基づき(from)」知る(知識を成し遂げる)のではなく、ひとは論証を「通じて(through)」知る。ただしそこで「通じて」は本質と属性の必然的な連関性ないし一性を見る一種の知的な観を指し示している。この探求論の仕事も本質の発見に基礎づけられており『信の哲学』の方法の骨格を形成していません。

現役最後の仕事となったアリストテレスの様相存在論については、2011年春にサンパウロ大学に招かれた折、5月3日に「待機力能」(standby *dunamis*)のアイデアを得て、今・このエルゴン次元における力能と実働の組と一般的なロゴス次元における力能と完成の組の関係を正しく理解するに至ったと考えております。因果性の理論である質料形相論を例えば魂と身体を存在論的にロゴス上の分離とエルゴン上の不分離の解明を通じて、所謂心の消去主義や物理主義的還元論に抗する道理ある包括的な心身論を構築できるのではないかと考えています。この様相存在論の理解はパウロが自らの方法論としてコミットしているものなのです。パウロは「キリストが私を介してロゴスとエルゴンによって為したこと以外のなにもものも私は語ることはないであろう」と「ローマ書」15章で言っていますが、信じる者にも信じない者にも共約的なロゴスとエルゴンの相補性こそ「ローマ書」の意味論的、様相論的分析の基礎となったのです。ロゴスとエルゴンの関係解明は『信の哲学』の多くのアイデアの基礎理解となりました。これまでのアリストテレス研究の多くのアポリアが解けるという感覚のなかに毎日過ごしております。この書評に励まされパウロ研究においても *Enfin* (At last: 遂にやった)と言われたいという思いにかられました。

6 パウロ研究の展開

時を再び遡り、1999年8月のブレイクに端を発したパウロ研究に戻りますが、パウロの意味論的分析は2000年夏に同僚宇都宮輝夫氏が世話役を務める学会で発表し、翌年「パウロ「ローマ書」の意味論」(『基督教学』第三十六号)として掲載されました。2001年秋に北大開催の中世哲学会で大貫隆先生が講演にこられた折に、初対面にもかかわらずその論文を差し上げたところ、翌年秋に思いがけなくも先生から月本昭男先生との共編『日本の聖書学』第八号への掲載のオファーをいただきました。その二、三日前にちょうどパウロを卒論に選んだ土谷(木浪)志帆さんとのチュートリアルの中でブレイクがありました。帰り道小雨そぼ降るなか、「今晚僕が死んだならこの真理を知っているのは君だけだから公にするように」と或る高揚感のなかで語ったばかりでしたので、大貫先生に三倍になってもよいからお尋ねしたところ許され、大きく展開することができました。

そのチュートリアルで「神の義」が「イエス・キリストの信を介して」に続く「信じる者すべてに」啓示

されたさいの「信じる者」とは第一に神にそう見做される者つまり神がその信仰を嘉みする者のことであり、人間の心的状態としての信仰の量質は問題にされていないことが明らかになったのでした。神がその信仰を嘉みする者が神の義の啓示の差し向け相手であるという当たり前のことに気付いたのでした。さもなければ、恩恵ではなく信じる事が功績になるでしょう。「神の前の自己完結性」が確保されないところでは、無条件の贈りものとしての恩恵も予定説も矛盾を抱えることとなります。そのなかで、各人は自らの信仰が嘉みされている当人だと信じることを妨げるものはありません。むしろ「汝が汝自身の側で持つ信を神の前で持て」(Rom.14:22)と励まされています。

その方向性のなかでそのころこの職名を伴った固有名「イエス・キリスト」の言語的振舞いが「イエス」や「キリスト」とは異なり、決して行為主体に用いられることのないことに気付きました。これは大きなソリッドな発見であり、長年論争のうちにあった「イエス・キリストの信」の属格「の」が主格的属格でも目的属格でもなく「帰属の属格」であり「イエス・キリストに帰属した信を媒介にして」という理解の決め手となり啓示の媒介という明晰な理解に至りました。パウロは同時に神の子でもひとの子でもある存在者「イエス・キリスト」には一つの行為を帰属させることができないと理解していたのでした。従って、神の義が、「イエス・キリストがもった信仰」という行為主体とする主格的属格の理解は否定されます。なお、トマスやルターら伝統的に取った目的属格つまり「イエス・キリストへの信仰を介して」の理解も否定されます。人間の心的状態としての強弱ある信仰が啓示の媒介にはなりえないからです。

これらの展開により神の前の人間現実が切り開かれていく感覚を得ました。それは「『ローマ書』におけるパウロの意味論—ピステイスの二相—」(2003)として世にでました。大貫先生からは、その後も人づてに先生が学会で私見を紹介して下さったとの由間接的に伺ったり、また「新しい領域を切り拓くことは間違いない」と出版の推薦文をお書きくださり本書の最終段階に至るまでご厚誼を賜りました。先生から頂いた執筆機会がその後の展開の基礎作業となりました。そのおりの「ローマ書」の中心箇所理解の進展はジグソーパズルの最後のピースの発見を備えたのでした。しかし、それは約十年 2012 年秋まで待たねばなりませんでした。

その間パウロ研究の新しい視点をえて水を得た魚のように思考が前進しそれまで理解できなかった神学者たちの議論も一つの立場として位置づけることができるようになりました。2004 年にはトマス・アクィナスとルター論争にパウロは既に和解案を提示していたこと、続いて 2006 年にハイデガーが『存在と時間』執筆時にはルター主義者であったことの確認にいたりました。また同年「ローマ書」の最初の翻訳を出版し、さらに 2008 年にペラギウス論争についてもパウロとの関連で双方を適切に位置づけることができました。アウグスティヌスのほとんど揚げ足取りとも思えるペラギウス攻撃のあまりの真剣さに、それまで神の前(A 福音と B 律法)と人の前(肉の弱さに譲歩された C 人間中心)の三層の言語網の析出で満足していましたが、聖霊の今・この実働(A+C)の言語の分析に取り組みざるを得なくなりました。歴史の審判に耐え歴史を審判している先人たちとの対論はそのなかでアポリアに陥ると自らの仮説が崩壊するのではないかという緊張感のなかで遂行されました。

2011 年の秋、Charles 先生とおだやかな初秋の日差しの中潮の引いたウエールズのカーディ

ガン湾の波で洗われ引き締まった砂浜を岬まで散歩しました。はじめてそこでパウロを本格的に議論しました。David の父君 Maurice Charles 先生はもはやアッテンボローの映画「炎のランナー」等から推測するしかない英国の長い伝統のなかにある牧師、神学者でした。David はお父上の影響下で哲学に向かわずにはいられなかったのだと思います。そう言えば、私の学生時代彼の口癖は 'narrow and straight road' というものでした。十六歳のとき他界された父上のイザヤ書の翼を張って鷲のごとく登っていくぐだり等の説教のことを稀に話題にすることはありましたが、David は概してこの問題には reticent (寡黙) でした。その彼とパウロについて議論できたことは思い出です。New Quay の海辺で潮騒を聞きながら心地よい風を浴びて、震災以後初めてリラックスした気持ちになりました。緊張下におかれたすべての日本にいる人々にこの大西洋からの心地良いリフレッシュな海風を味わってもらいたいと思いました。そのとき David に吟味いただいた Uchimura Kanzo on Justification by Faith in His Study of Romans は *Living for Jesus and Japan The Social and Theological Thought of Uchimura Kanzo*, ed. H. Shibuya and S. Chiba (Eerdmans 2013) として出版されました。これは長年の励ましと支援を受けた兄千葉真との初めての共同研究ともなりました。

大きなブレイクそして最後のピース発見は 2012 年 10 月 18 日にやってきました。その二週間前に、毎夏のサル川の清流心地よい大滝村での哲学合宿に常に参加し、またホームレス支援に奔走していた KA さんが若くして亡くなりました。K さんが夢枕にあらわれ「センセイ」と遠慮がちに呼びかけた瞬間に目が覚め、アイデアが降ってきました。「ローマ書」(3:22) の *diastolē* は従来のように信じる者のあいだに「区別 (distinction) は存在しない」或いは「差異はない」という意味ではなく、「神の義」とその啓示の媒介である「イエス・キリストの信」のあいだに「分離 (separation) は存在しない」という「分離」と訳すべきことに気がきました。神の義とその啓示の媒介であるイエス・キリストの信のあいだに「分離」は存在しないという読みに至りました。業の「律法とは離れて (*chōris nomō*)」分離されて、しかし信と義は分離されずに神の義が啓示されているため、その啓示の受けては業を為す者ではなく「信じる者すべて」とされるのです。神にとってもひとにとっても信は心魂の根源的態勢であったのです。業のモーセ律法も神の意志ですが、イエス・キリストの信において神の人類に対する肯定的な意志は明白に知らしめられたのでした。一方、Bauer の『新約聖書辞典』では Unterschied (「区別」) のみの訳語が提示されていますが、他方包括的な辞典 Liddle & Scott では最初に 'drawing asunder' 'separation' が提示され 'distinction' はより後に与えられています。四世紀のヒエロニムスにより二世紀以来の「古ラテン訳の改定」としてだされた Vulgata 版聖書 (CE382-385) においても 'non enim est distinctio' とあり、それ以来人類は「書簡全体の最も難しく最も不明瞭な箇所の一つ」(E. Käsemann) と評される「ローマ書」の重要な箇所についてずっと「信じる者のあいだに」「区別 [差異] がない」と訳してきたのでした。続く「なぜなら」(23-26) で始まる長い一文において、信義の分離のなさが三つの観点から説明されておりこの理解の正しさを確信しました。これは神の前の現実を析出する意味論的分析の成果だったと思います。

その後はとりつかれたように、新たな「ローマ書」の翻訳と解説の改訂版に取り組みました。彼女に夢で教えられ、これでジグソーパズルの last piece がはまったと感じました。その日を境にこの研究は弔い合戦の様相を呈するに至りました。ようやく誤訳を乗り越え、神の二つの意志である業の

モーセ律法からイエス・キリストの信を介した信の律法を切り離すことができ福音を福音として析出することができました。従来代償刑罰説など業の律法のなかで信の律法を或いは律法の枠のなかで福音を理解してきました。Kさんの卒論はレヴィナス研究であり「身代り」という題名でした。静岡県のお父様を数年後にお訪ねしたさいに娘は「仕送りを減らしてくれ」と言ってきたと母上様が語られました。ホームレスという限界状況にあるひとびととの交わりのなかで、「汝～すべし」という律法主義に引きずり込まれていたのでしょうか。四世紀以来の人文学者の責任を思います。誤ったインクの染みの形態がその後宗教戦争その他血の染みに変わってしまっていたのです。その弔い合戦のなかで、この他にも夢のなかで解くということが時におきました。前夜困惑のままに床に就くと寝ていても考えているからなのだと思います。

最後に 2013 年秋にアンセルムスの理性のみによる神学的贖罪論が私の意味論的分析に完全に対応していることを確認するにいたり大いなる安堵と喜びをえたのでした。彼は「聖書の権威に依存せず」つまり誤訳された聖書に基づかず引用することなく、素手で神の義と憐れみが両立する一点を開示したのでした。アリストテレスやパウロ、そして中世においてはアンセルムスをはじめ信のもとに魂のボトムにおいてまじりけなきものに触れつつ誠実に、真剣に明晰で堅固な思考を積み重ねられたひとびとの思索の伝統に励まされてきました。『信の哲学』にはテキストの理解が不明瞭であると感じられたときにテキストに戻ると、想定以上にはるかに緻密にしかも明晰に思考が展開されており、あいまいな読解の修正させられた痕跡が記憶しきれないほどに多く刻まれています。何世紀にもわたりひとびとは連綿と戦争やペストなどに耐えつつそのテキストを伝え今日に至っていません、彼らも確かなものをそこに見出していたからです。他方、ヨーロッパの思索の歴史がパウロをめぐるごとき、その後の人々の大きな関心を集めました。アボリアが既にパウロにより調停されていたにもかかわらず、最初の誤訳故に多くの混乱を引き起こしていたことはとても不幸なことでした。インクの滲みが血の滲みに代わってしまったのなら、インクの異なる形の滲みが血を拭くこともあるやもしれないと自らを奮い立たせてきました。

その後 Helsinki 大学に 2014 年春に招かれアリストテレスの様相存在論とパウロの「ローマ書」の意味論的分析で発表しました。Simo Knuuttilla 先生は「神の前」と「ひとの前」の分節の仕方とライブニッツによる神の予知と人間の自由の両立性との親近性に触れ、美しいライブニッツの理論の検討を促されました。また先生は B.Russell と G.Moore が聖書の研究に集中的に取り組んだことがあって、ほどなく incomprehensible と匙を投げたというエピソードに触れ、「おかしいな、彼らはギリシヤ語を読めたはずだが、どうしてこの見解に至らなかったのだろう」と話されました。頂いたメールには 'philosophically thought-provoking' とありました。

2014 年夏に 'A Semantic Analysis of Paul's Romans-Ergon and Logos' を書き終えたとき、既視感に襲われました。四十年前に中村獅雄の『基督教の哲学的理解』(教文館 1943)に衝撃を受け、その当時は当然白紙でしたが書きたいと思っていたことはまさにこれだった、これを書きたかったのだと四十年の歩みを一気に遡った感覚を持ちました。やはり問いの不思議に捕われ、ああでもないこうでもない模索していること、そのことが一本の目に見えない道を形成していたのだと思います。だからこそ書き上げてみて時を遡る仕方で一気にその歩みをトレースできるように感じたのだと思

います。既視感の経験を持つひとは誰であれ、ずっと心の片隅にその事柄を留めていたひとであらうと思います。

2015年3月にOxfordの定年を機にYale大学に移動されたCharles先生との共同研究のためNew Havenを訪ねた際に、Yale大学Divinity Schoolの長を長年されたHarold Attridge先生に私見を吟味いただきました。彼からの次のメールによるコメントは大きな励ましでした。「私は「ローマ書」の君の現行の多くの読みは、「主格的属格」と「目的属格」の両極を媒介する努力をも含めて、とても魅力的なものであると見出します(I find..quite attractive)。わたしたちの議論はパウロと神の救済行為についての彼の理解についての私の思考にインパクトを持ち続けるであろうことを確信しています(I am sure..continue to have an impact)」。まことに'Today Romans, tomorrow Aristotle'の四十年の日々でした。チャールズ先生はこの報告に'forty years in the wilderness?'と応答くださいました。この三十年まことに彼は荒野に彷徨う私を導く「火の柱、雲の柱」でした。

私のこの歩みの最初の十年のSeelsorgerの労を担ってくださった故関根正雄先生は1985年に留学のご挨拶に伺った時に「いつか二つは繋がると思う」と言われ、「信仰のみで哲学に励んでください」とイギリスに葉書きを下されたことを思い出します。それから三十年がたち、ようやく二つの歩みは融合しました。パウロを理解すべく哲学の世界に踏み入った私には何か遠くに網を投げ、とうてい回収できないように長く思われていたのですが、二つのアイデアとその相補的な展開により一応網を回収できました。その内実は読者諸賢に吟味いただくしかありません。

『信の哲学』の構想は内村鑑三の弟子塚本虎二の弟子である父母から自然に与えられた宿題に遡ります。その宿題は内村以来三、四代かけての真剣な取り組みから引き渡された問い以外の何物でもありませんでした。内村は言います、「旧約は新約を似て解すべし、新約は羅馬書を似て解すべし、羅馬書は其の第三章二一節より三一節までを似て解すべし、神の黙示に由り羅馬書第三章二一節より三一節までを解し得し者は全聖書を解し得るの貴き鍵を神より授けられし者なりと信ず」(『聖書の研究』172(1914))。父母の歴史は私には与件でしたが、クラーク先生の訪日なしに私は存在しないことを含意します。その岸辺に恐竜の足跡を探した葦に隠れて天父を仰いだ若き内村が逍遙した茨戸川の岸辺に住み、毎朝ペケレットの森と残雪残る凜とした山並みを見ながら今は亡き犬ベルと散歩しました。二十年前の茨戸川畔でのあの秋の日の天啓とそれに基づく二年後の洞察は発見してしまったかもしれない者の喜びと使命感のなかでその後の日々を方向づけました。内村以来の宿題を一世紀という長い年月が流れた今ようやく提出です。四十年以上ものあいだ同じテキストに埋もれることができた環境にただ感謝します。

哲学はどこまで美しく思考するかにかかっており、これまでそうであったように、今後もこの仕事は改善され続けることでしょう。私の不明瞭なところは次の世代に託すことにいたします。人文学者は分かりやすく古典を紹介する使命を持ちます。ようやくできたこのロゴスの乏しい歩みは私には精一杯です。終わりまで(とりわけ複合的な聖霊の働きの理解と記号表記をめぐる)私のロゴスがついに崩壊するのではないかという危機を感じて今日にいたります。いつ私よりはるかに明晰な人に論駁され、積み上げてきたものが破綻するかもしれないという思いの中で自己論駁を企てる緊張の日々でした。いつの頃からか、先人たちの論争を解決したいという思いよりも、ロゴス以外に蓄積しえたも

ののないなかで、この歴史のなかで与えられた自分の最善のものを真理に捧げたいという思いに代わっていました。もっと言えば、本書の文字を刻むことは過去への償いであり、未来世代が悪から解放されることへの祈りであったかと思えます。

7 おわりに

この講義の終わりにハムレットとのバランスのために、アンセルムスの論証の美しさに弟子ボゾの口についてでた言葉を引用します。私もアンセルムスの「真っ直ぐ(*rectitudo*)」に基づく正義と憐れみの両立の論証が意味論的分析に完全に合致したと思えた時、同じ感覚を持ったことを告白せざるをえません。この告白はアンセルムスの *intellectus fidei* (信じて理解する)の立場の手前で、信じる者にも信じない者にも共約的な次元において *intellectus ante fidem* (信以前の理解)として聖書の使信の言語的特徴の理解を求め、壊れない文章を刻むことをめざした信の哲学にとって必ずしも方法論上の制約を逸脱するものではありません。『信の哲学』における共約性規準の積み重ねの延長線上において、共約の可能性は残るからです。ボゾは言います、「何もこれ以上理に適うものはなく、何もこれ以上甘美なるものもなく、何もこれ以上、世が聞くことのできる望ましいものはありません。私はこのことから、心がどれほど喜びにあふれているかを語るができないほどの信を抱きます。といますのは、神はこの御名のもとにご自身に向かういかなるひとをも受け入れ給わないことはないと私には思われるからです」(*Cur Deus Homo*, II 19, cf. Rom. 15.13)。人類は信に絶えず立ち帰ることによってだけ難局を切り抜けることができるでもありましょう。根底に生起する信のあるところ、そこに魂の刷新があるからです。

この春から川崎市多摩区にあります男女学生寮 登戸学寮の舎監を妻美佐子と共に勤めます。気候変動や格差社会など人類の存続が問われている現代、パウロ的には「被造物全体が贖われることを求めて呻いている」この難しい時代に、ひとびとと共に生きるということをしてみようと思います。アリストテレスは「ロゴスの真理はエルゴンにより信用される」と言います。今までロゴスの世界に生きてきて、いつも如何なる意味においてその反対が真であるのかを吟味してきました。そのため、ロゴスをロゴスによる論駁することが習性となってしまったために、自ら立てたロゴスを信用できないという事態に陥っていました。ここでは書物を捨てて自らこれまで紡いだロゴスがどれほどの力あるものなのか現場で実験してみようと思います。

ソクラテス、孔子そしてイエスも書き物としてのロゴスを遺しませんでした。ひとが書物を遺すのは、それが壊れないセンテンスからなるものであることを願ってのことでありましょう。つまり永遠の真理をめざしているのです。そしてまことに多くの書物は賞味期限が過ぎたもの、或いは誤ったもの、さらには乗り越えられたものとして消えていきました。なぜか彼らの弟子たちプラトン、アリストテレスそしてパウロらが遺した書物は古典として生命の輝きを放ちつづけています。永遠の相という視点からみれば、ソクラテスやイエスが書物を遺すことを必要としていなかったのは、あたかも放物線が接線に触れるように、永遠が彼らのエルゴンの一挙手一投足に宿っていたからではないかと思われれます。パウロ研究により解明したことが真であるとしますなら、それは永遠とこの時間的なものあいだを媒介するなものか今・ここで働いているからでもありましょう。アリストテレスやパウロは

その師匠たちの引力のなかで、彼らの知性が永遠なるものとの関連で著しく刺激され、あれほどのロゴスを遺すことになったのでありましょう。これまで半世紀近く、彼らのテキスト研究に身をうずめてまいりましたが、彼らに裏切られることが一度もなかったことを今確認しています。彼我の大きさを知らされるばかりの歩みでしたが、それほど一級なものは一級なのでありましょう。この罪悪深重、極悪至上、地獄ぞ一定すみかぞかしの愚者にとりまして、彼らによりひとの生は確かなものであるという光をいただいたことは幸いなことでありました。

私は確かに真理を愛するという名のもとにテキストを信じ、愛してきたかもしれませんが、しかし、真理を愛しても「平和を造るひと」ではなかったと思います。山上の説教にあります、「祝福されている平和を造る者たち、なぜなら彼らは神の子と呼ばれるであろうから」とあります。私は神よりも理性の真理の根源である矛盾律をさらにはそのもとにきづかれる明晰なテキストをより一層信じ、愛してきたのだと思います。そこには人格的な交わりが希薄であったと思います。ロゴスへのこだわりのあまりに、愛されていることに気づくことが少なかつたからでありましょう。悔い改めて、信の人格的な交わりの根源性から残りの生を造っていきたいと思います。今後はこれまで蓄積した乏しいロゴスを生きるにより、その真理性を実験してみようと思います。そこでは認知的な次元で、例えば死者の甦りを信じるという目的語を取る仕方で、信を捉えるのではなく、「信じます、信なきわれを憐れみたまえ」と福音書にありますように、また「希望の神が、..汝らを信じることにおけるあらゆる喜びと平安で満たしたまうように」とパウロが言いますように、目的語なしの信に、人格的な次元で信の促しに対する応答のなかでだけ、つまり信の根源性からのみ生きてみようとおもいます。ソクラテスはひとびとから「シビレイのようだ」と言われていました。彼は自ら真理に痺れているから、周囲のひとびとにそのシビレが伝わるのだらうと応答しました。私も何があっても喜びに溢れたいと思います。それが伝わることを願いつつ。行動原則はもはや単に真理を求めるということではなく、真理を愛し讚美しつつ、今・ここにおいて遂行されるであろう行為は他者との共なる生において平和を造るかとなります。今後は神の前とひとの前をわけずにその都度その媒介するものに痺れていることによって、周囲にどれだけその喜びが伝わるかにチャレンジしたいと思っています。そのエルゴンの一挙手一投足に生きたいと思います。ともあれ、今日までの私の拙い、かたよりあるロゴスの営みに寛容にお交わりいただきまことにありがとうございました。

最後に「思索と人生」という教養の哲学の授業でいつも歌っていた宮澤賢治の「生徒諸君に寄せる」を30年の日々を思い出しながら、若くなくなってしまったこれまでの学生諸君にそれでも奉げたいと思います。

千葉 恵

『信の哲学』執筆後における追想(幻の「後書き」)

2017年10月31日 ルター宗教改革500年

俺のことなど信じてはならなかったのだ。古い持ち合わせに美德を接ぎ木することはできず、親木の穢れを賞味するであろう。…俺は自惚れで、執念深く、野心家だ。それにもまして衝動の赴くまま、とっさにどんな無法をしてかすか知れたものじゃない。どうしてかすか思考を巡らす暇も、それらに形を与える想像を働かせる暇も、いつ実行するかその見境もなしに。地と天のあいだをのた打ち回っている俺のような輩は何をすべきだというのか。われらは、みな、名うての悪党なのだ。われらの何人たりとも信じるな。尼寺へ行け。(W.Shakespeare, Hamlet Act III ,Sc1)。

De nobis ipsis silemus (われら自らのことについては沈黙する)。カントの『純粋理性批判』序文の F. Bacon の言葉を自戒としつつ、本書をよりよく理解いただくために、執筆過程を振り返ることをお許しください。本書の構想は 1997 年 10 月 4 日と 1999 年 8 月 15 日にえた二つアイデアに遡ります。最初のもは秋の柔らかな陽射しのなかでの自宅近くのベケレット湖畔でした。前日数時間熊のように落ち葉踏みしめ彷徨いましたが、突破できずに帰宅し、翌日促されるように再訪し旧石狩川の三日月湖(茨戸川)に面した切り株に腰をおろした時のことでした。おもむろにアリストテレス『形而上学』を開けたとき、*to ti ēn einai*(「何であったか(本質)」)と *to ti esti*(「何であるか」)の二つの字句が目飛び込んできた瞬間にえたものです。「あっ、ソクラテスの「何であるか? (*ti esti*;)」の問い直した」と叫びました。彼の哲学全体にとっても基本的であり中心的な概念「本質」に関する一瞬の閃きでした。テキストをポケットにいれて「後は美しく書くだけだ」と畦道をぬけて家路に急ぎました。その視点から『トピカ』を読むと次々に隠されていたものが明らかになりました。主語と述語の連関という哲学に最も基礎的な「オルガノン(道具)」と呼ばれる言語分析の作業にその後長く従事しました。

二番目のものは夏の暑い夜自宅で、文語訳で「ローマ書」を読んでいた時のことです。パウロが「神は彼らを恥ずべき情欲に引き渡した」と報告するとき、「恥ずべき」により当人がどう感じているかが、まず神にその語により理解されていることがらが指示されているはずだと気付きました。神はギリシャ語に対応する言語使用者であり、語彙の理解を持ちそして認知的に十全な神はその理解において神の前の人間を把握しているということに気付きました。これは先のように天啓というのではなく、ああそうなのだという当たり前のことに気付いたという感覚でした。これは私のパウロ研究の行き詰まりを打開するという予想を伴い、一気に視界が開けました。神の前とひとの前の分節と総合の意味論的分析の歩みが始まりました。

この二つの経験はアリストテレスとパウロ双方のヌースがヒットしていたものに私のそれが追体験したものであることを願いますが、この間十数年、困難に出会うたびにこの二つの特別の経験に立ち帰り直観を信じ続けました。今から思えば、最初の発見に基づく本質をめぐる主語と述語連関の二年におよぶ言語分析が第二の気付きに繋がりました。やはり哲学の訓練はアリストテレスの「オル

ガノ」の習得から始めることが肝要です。二つの洞察は言語哲学から様相存在論に至る今日までの私の思索を支えました。さらに、その準備として一九八五年春の出会い以来 David Charles 先生の十数年にわたる思索の現場に立ちあい学ぶことができたことがあったと思います。いみじくも先生の思索の結晶は二千年に *Aristotle on Meaning and Essence*(Oxford 2000)として出版されました。

四半世紀のあいだ異国の母のように慕ったディヴィッドの母君 Mrs. Elizabeth Charles(1910-2008)は私が「ローマ書」に入れあげているのを見て教えて下さった言葉があります。彼女の先生の聖書学者 Wheeler Robinson 教授がいつも Today Romans, tomorrow Romans と言っておられたというのです。これは忘れられない言葉となりました。私の場合は Today Romans, tomorrow Aristotle でしたが、実際パウロが伝える人間にとって究極的な事柄がアリストテレス研究を促し、その研究が進展するたびに、パウロが新しく読めるという送り返しの日々でした。本書はその果実です。

本質の言語分析が次第に形を取り出して、共同研究のため 2005 年秋から一年オックスフォードに滞在したおり、チャールズ先生は私に「本質」についての論文出版のオファーをくださいました。その後も先生との議論が続き、a serious concern や you fiddle..等の真剣な批評のなかで困難を一つ一つ乗り越えてゆきました。アリストテレスのように優れたテキストについては最初のアイデアが正しければ、その後の思考は確実に前進するものであり、そして端的な同意にいたるものであることを経験しました。もはや学生と教師のあいだではなく、真剣に哲学する者同士の論文執筆にむけての数年にわたる議論は私の生涯の宝です。2008 年に The paper is really good and deserves to make an impact.とコメントを頂き、ようやく一人前になったという感覚を持ちました。

発見から一三年かかりましたが、*Aristotle on Essence and Defining-phrase in his Dialectic* が先生編集の *Definition in Greek Philosophy* (Oxford 2010)において出版されました。その間の思考の展開は 1997 年秋の先の思いつきに基づいて一気に一書となった拙著『アリストテレスと形而上学の可能性—弁証術と自然哲学の相補的展開—』(勁草書房 2002)第三章とこの論文との相違に如実に見出すことができます。言語哲学としてはるかに実りある展開が遂行されました。論文はベルリン、オックスフォード、ラトガス等で吟味され仕上げられてゆきました。共同研究を通じて恣意性が完全に拒否される揺るぎないサトルな世界を見出したのだと思います。世界がそれ自身で確かなものであるということ、ただそれだけで喜びでした。

この仕事はアリストテレス哲学の基礎的な問題であり二千年謎の問題であっただけに、反響を呼び多くの書評や研究書また電子版 Encyclopedia 等での引用がなされ今日に至っています。また 2010 年 3 月 Christopher Shields 氏が北大に講義にこられたおり、初代教頭クラーク先生の胸像の向かいの明治時代の建造物古河講堂にある私の研究室でこの論文の校正刷りを読む機会がありました。彼はそれを読みながら「この難しい問題について、こんなにクリアに書けるのか」と驚きました。その晩北大でのすべての日程を終えて茨戸川河畔で夕食をとりながら彼の編集する *Oxford Handbook of Aristotle* (Oxford 2012)にオファーくださったのは僥倖以外の何ものでもありませんでした。それにより私の修士時代から博士論文に至るまで長い間取り組んだ『分析論後書』の研究が *Aristotle on Heuristic Inquiry and Demonstration of What It Is* として日の目を見るに至りました。この論文執筆時に三十年従事した探求論のラストピースを埋める正しい読み(93a4:Bekker 版)にいた

りました。この探求論も本質の発見に基礎づけられており本書の方法の骨格を形成しています。

「本質」については C.Arpe は「かつてポーニッツがアリストテレス哲学の心と呼び、彼の哲学の最も困難な部分」(*Das ti ēn einai bei Aristoteles*)と述べ、また E.Anscombe は「これらの構成 [*to ti ēn einai*] はまったく尋常ならざるギリシャ語である。・・それらの起源については思弁のことに属する。ひとは、それらが何を意味しているのか、・・核心は何であるのかについて心を決めることなしにアリストテレスを理解することを望むことはできない」と言います (*Three Philosophers*)。

ソルボンヌ大学の D.Lefbvre 教授の書評の一部を紹介することをお許しください。「アリストテレスに関しては、千葉恵の論文が古代研究者たちの注意を引きつけた、なぜなら著者が敢然と取り組んでいるものは(ひとは「遂にやった」或いは「また(新説)か」と言うであろう(*Enfin ou encore une fois dira-t-on*)) 翻訳不能という評判の表現 *to ti ēn einai* の正確な意味についての刺すような問いだからである。・・理論上の主要な進展(*Le progress majour theorique*)は、アリストテレスが項(*horos*[定義形成句])の固有な意味において、定義をまたは *definiendum*(被定義項)の本質の表現をただ表現 *to ti ēn einai* のみに制限すべく、プレディカビリア(述語づけ可能なもの)であるところの定義的(*horika*)という諸表現を区別しているその様式に存する。・・」(*Revue Philosophique de Louvain* 110(1), pp.169-172,2012)。

本質はとても基礎的な概念であるだけに、その後多くのアポリアが解けるという感覚のなかにあります。様相存在論については、2011 年春にサンパウロ大学に招かれた折、5 月 3 日に待機力能(*standby dunamis*)のアイデアを得て、今・ここのエルゴン次元における力能と実働の組と一般的なロゴス次元における力能と完成の組の関係を正しく理解するに至ったと考えております。この様相存在論の理解は本書においてもロゴスとエルゴンの分節と総合の基礎理解となりました。この書評に励まされパウロ研究においても *Enfin* (At last:遂にやった)と言われたという思いにかられました。

時は再び廻りパウロ研究に戻りますが、パウロの意味論的分析は 2000 年夏に同僚宇都宮輝夫氏が世話役を務める学会で発表し、翌年「パウロ「ローマ書」の意味論」(『基督教学』第 36 号)として掲載されました。それが大貫隆先生の目にふれ、翌年秋に思いがけなくも先生から月本昭男先生との共編『日本の聖書学』第八号への掲載のオファーをいただきました。その二、三日前にちょうどパウロを卒論に選び、今回索引作成に尽力された木浪(土谷)志帆さんとのチュートリアルの中でブレイクがありました。帰り道小雨そぼ降るなか、「今晚僕が死んだならこの真理を知っているのは君だけだから公にするように」と或る高揚感のなかで語ったばかりでしたので、大貫先生に三倍の長さのお許しをえて大きく展開できました。

そのチュートリアルで「神の義」が「イエス・キリストの信を媒介にして」に続く「信じる者すべてに」啓示されたさいの「信じる者」とは第一に神にそう看做される者つまり神がその信仰を嘉する者のことであり、人間の心的状態としての信仰の量質は問題にされていないことが明らかになったのでした。神がその信仰を嘉する者が神の義の啓示の差し向け相手であるという当たり前のことに気付いたのでした。さもなければ、恩恵ではなく信じるのが功績になるでしょう。「神の前の自己完結性」が確保されないところでは、無条件の贈りものとしての恩恵も予定説も矛盾を抱えることとなります。そのなかで、各人は自らの信仰が嘉されている当人だと信じることは神と正しい関係を結ぶ唯一の道であるが故に実質的なことであり、「汝が汝自身の側で持つ信を神の前で持て」(*Rom.14:22*)と励まされています。

その方向性のなかでこの職名を伴った固有名「イエス・キリスト」の言語的振舞いが「イエス」や

「キリスト」とは異なり、決して行為主体に用いられることのないことに気付きました。これは大きなソリッドな発見であり、長年論争のうちにあった「イエス・キリストの信」の属格「の」が主格的属格でも目的格的属格でもなく「帰属の属格」であり「イエス・キリストに帰属した信を媒介にして」という理解の決め手となり啓示の媒介という明晰な理解に至りました。パウロは同時に神の子でもひとの子でもある存在者「イエス・キリスト」には一つの行為を帰属させることができないと理解していたのでした。従って、神の義がイエス・キリストがもった信仰という行為主体とする主格的属格の理解は否定されます。なお、トマスやルターら伝統的に取った目的格的属格つまり「イエス・キリストへの信仰を介して」の理解も否定されます。人間の心的状態としての強弱ある信仰が啓示の媒介にはなりえないからです。

これらの展開により神の前の人間現実が切り開かれていく感覚を得ました。それは「ローマ書」におけるパウロの意味論—ピステイスの二相—(2003)として世にでました。大貫先生からは「新しい領域を切り拓くことは間違いない」と『信の哲学』出版の推薦文を頂くなど最終段階に至るまでご厚誼を賜りました。このときの「ローマ書」の中心箇所理解の進展はジグソーパズルの最後のピースの発見を備えたのでした。しかし、それは約十年 2012 年秋まで待たねばなりませんでした。

その間パウロ研究の新しい視点をえて水を得た魚のように思考が前進しそれまで理解できなかった神学者たちの議論も一つの立場として位置づけることができるようになりました。第三部で展開した先駆者たちとの対論は 2004 年のトマス・アクィナスとルター論争を皮切りに昨年第五章カントにまで至りました。パウロは両者に既に和解案を提示していたこと、続いてハイデガー研究、ペラギウス論争研究、アンセルムス研究等に展開を見ました。アウグスティヌスのほとんど揚げ足取りとも思えるペラギウス攻撃のあまりの真剣さに、それまで三層(ABC)の言語網の析出(聖霊の媒介は肉の弱さへの譲歩により(a-inC)として処理)で満足していましたが、聖霊の実働の言語Dの分析に取り組みざるを得なくなりました。歴史の審判に耐え歴史を審判している先人たちとの対論はそのなかでアポリアに陥ると自らの仮説が崩壊するのではないかという緊張感のなかで遂行されました。

2011 年の秋、チャールズ先生とおだやかな初秋の日差しの中潮の引いたウエールズのカーディガン湾の波で洗われ引き締まった砂浜を岬まで散歩しました。New Quay の海辺で潮騒を聞きながら心地よい風を浴びて、震災以後初めてリラックスした気持ちになりました。緊張下におかれたすべての日本にいる人々にこの大西洋からの心地良いリフレッシュな海風を味わってもらいたいと思いました。そのとき吟味いただいたパウロの意味論的分析による内村鑑三の「ローマ書」研究の論文は *Living for Jesus and Japan: The Social and Theological Thought of Uchimura Kanzo*, ed. H. Shibuya and S. Chiba (Eerdmans 2013) として出版されました。これは長年の励ましを受けた兄千葉真との初めての共同研究ともなりました。

大きなブレイクそして最後のピース発見は 2012 年 10 月 18 日にやってきました。毎夏の清流流れる大滝村での哲学合宿に三年参加し、またホームレス支援に奔走していた A さんがその二週間前に若くして亡くなりました。その A さんが夢枕にあらわれ「せんせい」と遠慮がちに呼びかけた瞬間に目が覚め、アイデアが降ってきました。「ローマ書」(3:22)の *diastolē* は従来のように信じる者のあいだに「区別(distinction)はない」或いは「差異はない」という意味ではなく、「神の義」とその啓

示の媒介である「イエス・キリストの信」のあいだに「分離(separation)はない」という「分離」と訳すべきことに気付きました。神の義とその啓示の媒介であるイエス・キリストの信のあいだに「分離」は存在しないという読みに至りました。業の「律法とは離れて(*chōris nomū*)」分離されて、しかし信と義は分離されずに神の義が啓示されているため、その啓示の受けては業を為す者ではなく「信じる者すべて」とされるのです。神にとってもひとにとっても信は心魂の根源的態勢であったのです。

一方、Wauer の『新約聖書辞典』では Unterschied(「区別」)のみの訳語が提示されていますが、他方包括的な辞典 Little&Scott では最初に drawing asunder, separation が提示され distinction はより後に与えられています。四世紀のヒエロニムスにより「古ラテン訳の改定」として公開された Vulgata 版聖書(CE382-385)においても *non enim est distinctio* とあり、それ以来人類は「書簡全体の最も難しく最も不明瞭な個所の一つ」(E.Käsemann)と評される「ローマ書」の重要な箇所についてずっと「信じる者のあいだに」「区別[差異]がない」と訳してきたのでした。続く「なぜなら」(23-26)で始まる長い一文において、神の信義の分離のなさが二つの観点から説明されておりこの理解の正しさを確信しました。これは神の前の現実を析出する意味論的分析の成果だったと思います。その後はとりつかれたように、新たな「ローマ書」の翻訳と解説の改訂版に取り組みました。彼女に夢で教えられ、これでジグゾーパズルの last piece がはまったと感じました。その日を境にこの研究は弔い合戦の様相を呈するに至りました。この他にも夢のなかで解くということが時におきました。前夜困惑のままに床に就くと寝ていても考えているからなのだと思います。

2013 年秋にアンセルムスの理性のみによる神学的贖罪論が私の意味論的分析に完全に対応していることを確認するにいたり大いなる安堵と喜びをえたのでした。彼は「聖書の権威に依存せず」つまり誤訳された聖書に基づかず、素手で神の義と憐れみが両立する一点を開示したのでした。アリストテレスやパウロ、そして中世においてはアンセルムスをはじめ魂のボトムにおいてまじりけなきものに触れつつ誠実に、真剣に明晰で堅固な思考を積み重ねてきたひとびとの思索の伝統に励まされてきました。本書には、考察対象に選んだテキストが不明瞭であると感じられたときにテキストに戻ると、想定以上にはるかに緻密にしかも明晰に思考が展開されており、あいまいな読解の修正を迫られた痕跡が記憶しきれないほどに多く刻まれています。何世紀にもわたりひとびとは連綿と戦争やペストなどに耐えつつそれらのテキストを伝え今日に至っています、彼らも確かなものをそこに見出していたからです。他方、ヨーロッパの思索の歴史がパウロをめぐるかのごとくに、その後の人々の大きな関心を集めました。アポリアが既にパウロにより調停されていたにもかかわらず、最初の誤訳故に多くの混乱を引き起こしていたことはとても不幸なことでした。インクの滲みが血の滲みに代わってしまったのなら、インクの異なる形の滲みが血を拭うこともあるやもしれないと自らを奮い立たせてきました。

その後 Helsinki 大学に 2014 年春に招かれアリストテレスの様相存在論とパウロの「ローマ書」の意味論的分析で発表しました。Simo Knuuttilla 先生は「神の前」と「ひとの前」の分節の仕方とライブニッツによる神の予知と人間の自由の両立性との親近性に触れライブニッツの検討を促されました。また先生は B.Russell と G.Moore が聖書の研究に集中的に取り組んだことがあって、ほどなく incomprehensible と匙を投げたというエピソードに触れ、「おかしいな、彼らはギリシャ語を読めたは

ずだが、どうしてこの見解に至らなかったのだろう」と話されました。頂いたメールには philosophically thought-provoking とありました。

2014年夏に A Semantic Analysis of Paul's Romans-Ergon and Logos-を書き終えたとき、既視感に襲われました。四十年前に中村獅雄の『基督教の哲学的理解』(教文館 1943)に衝撃を受け、その当時は当然白紙でしたが書きたいと思っていたことはまさにこれだった、これを書きたかったのだと四十年の歩みを一気に遡った感覚を持ちました。やはり問いの不思議に捕われ、ああでもないこうでもない模索していること、そのことが一本の目に見えない道を形成していたのだと思います。だからこそ書き上げてみて時を遡る仕方で一気にその歩みをトレースできるように感じたのだと思います。既視感の経験を持つひとは誰であれ、ずっと心の片隅にその事柄を留めていたひとであろうと思います。

2015年3月にオックスフォードの定年を機にイエール大学に移動されたチャールズ先生との共同研究のため New Haven を訪ねた際に、イエール大学 Divinity School の長を長年された Harold Attridge 先生に私見を吟味いただき、後に次のコメントが送られてきました。「私は「ローマ書」の君の現行の多くの読みは、「主格的属格」と「目的属格」の両極を媒介する努力をも含めて、とても魅力的なものであると見出します。わたしたちの議論はパウロと神の救済行為についての彼の理解についての私の思考にインパクトを持ち続けるであろうことを確信しています」。まことに Today Romans, tomorrow Aristotle の四十年の日々でした。チャールズ先生はこの報告に forty years in the wilderness? と応答くださいました。この三十年まことに彼は荒野に彷徨う私を導く「火の柱、雲の柱」でした。

私のこの歩みの最初の十年の Seelsorger の労を担ってくださった故関根正雄先生は 85 年に留学のご挨拶に伺った時に「いつか二つは繋がると思う」と言われ、「信仰のみで哲学に励んでください」とイギリスに葉書きを下されたことを思い出します。それから三十年がたち、ようやく二つの歩みは融合しました。パウロを理解すべく哲学の世界に踏み入った私には何か遠くに網を投げ、とうてい回収できないように長く思われていたのですが、二つのアイデアとその相補的な展開により一応網を回収できました。

この間幾つかの学会での発表や各地に聖書の話に招かれ、種々吟味いただいた方々を今感謝の念とともに思い起こします。「ローマ書」の翻訳は故泉治典先生と同僚戸田聡氏により吟味いただきました。また T. Engberg-Pedersen 教授は 2012 年クリスマスの照明美しいキルケゴールの故郷で、双方とも愛するパウロについて初対面にもかかわらず二日間十時間以上にもわたって議論する機会をえて、new agenda と励ましてくださいました。「ローマ書」の影響力ある二冊の註解書の著者 James Dunn 教授とはこの数年メールにて二十回以上意見の交換があり、有益な示唆をいただきました。信と業の antithesis(対照・反定立)に固着される先生にプロテスタントの一つの典型を見る思いでした。信義の「分離はない」を含む私見は quite understandable in isolation とのことでした。2016 年春には学生時代の友人イエズス会神父 Kevin Flannery に招かれローマの Gregoriana 大学で話す機会がありました。彼は分析哲学者でもあり当該箇所の新しい読みギリシャ語の読みとしても完全に同意してくれました。

北大文学部の同僚とりわけ山田友幸氏をはじめ哲学・倫理学専修の歴代の同僚諸氏そして事務の方々の寛容なお支えにより本書をまとめあげることができました。学生時代以来ずっと私のこの茫漠たる問いに関心を示し、寛容のなかに期待し続けてくれた何人かの友人たち、そして日曜の集会や金曜の集会、クラーク聖書会等で聖書を共に学んでくださった歴代の人々を思い返します。そし哲学専攻の大学院生諸君そして古代、中世哲学史、哲学概論、信の哲学、思索と人生、論理学等の歴代の受講学生諸君に感謝とupdateの報告をここにいたします。少しなりとも明瞭になった講義を彼らの前でやり直したいものです。卒業生の井村直道氏は草稿全てを読み有益なコメントを下さり、また「在りし日の講義の続きを拝聴しているかのような錯覚と郷愁の念」を抱くとあり励まされました。クラーク会創成会員で米国在住の上沼昌雄神学博士からも毎週のようにお励ましを頂き、改善することができました。先生は至る処で私見を吟味下さり、両国に新たな未見の知己を得ることができその方々から revolutionary や「哲学と文献学に基づく、神学にない発見」等のコメントを頂きました。

以上が今日までの信をめぐる私の遅々としたまどいつつのロゴスの歩みでした。「何故これほどの長さなのか」、「大著は悪著」というご指摘に対しては、端的には、人間とは誰か、一体何者かという自己理解の問いをめぐり、ひとびとに最も多く読まれてきた書物の神学思想の中心部分に誤訳があり、その後の何世紀にもわたる論争を解決しつつ新しい知見を確立するのにこの長さを要したと応えます。二十年前の茨戸川畔でのあの秋の日の天啓とそれに基づく二年後の洞察は発見してしまったかもしれない者の喜びと使命感のなかでその後の日々を方向づけました。前学問的には四十年以上自らに問題を抱えてきたことの告白によりその応答とします。十代から自らにすくう悪の手強さに手を焼き、ローマ帝国を迫害の受け手として素手で滅ぼしたと言われる「ローマ書」にどんな救いのマジックが隠されているのかという思いがこの間の探求のエンジンでした(信と不信をめぐる私の実人生のエルゴンについては冒頭「ハムレット」の引用箇所から推し測っていただく他ありません)。ここにはマジックはなく、ロゴスとエルゴンの分節と総合により明晰なロゴスがあるということを見出し、同じ問いを抱えた先達たちを介しての確証に、私にはこれだけの長さを必要としました。神は言語使用者であるという形而上学的負荷のない仮説に基づき思考の手掛かりをえましたが、そうはいものの心魂の底に生起するものを媒介にしての宇宙の始終を統べる存在者の探求は次々に問いが生まれ、その解の模索は当然途上であり、次の世代に託すしかありません。

私は第七章でアンセルムスの論証が意味論的分析に完全に合致したと思えた時、彼の論証の美しさに弟子ボゾの口についてでた言葉と同じ思いを抱きました。ハムレットとの対照としてボゾの言葉をもう一つの告白として引用します。この告白は信じる者にも信じない者にも理解可能な *intellectus ante fidem*(信以前の理解)を展開した信の哲学にとってその方法論上の制約を逸脱するものではありません。本書における共約性規準の積み重ねの延長線上において、共約の可能性は残るからです。ボゾは言います。「何もこれ以上理に適うものはなく、何もこれ以上甘美なるものもなく、何もこれ以上、世が聞くことのできる望ましいものはありません。私はこのことから、心がどれほど喜びにあふれているかを語るができないほどの信を抱きます。といますのは、神はこの御名のもとにご自身に向かういかなるひとも受け入れ給わないことはない私には思われるからで

す」(*Cur Deus Homo*, II 19, cf. Rom. 15.13)。人類は信に絶えず立ち帰ることによってだけ難局を切り抜けることでありましょう。根底に生起する信のあるところ、そこに魂の刷新があるからです。この上下巻の一書がどれだけの問いへのどれだけの解でありうるかは読者諸賢のご判断にお任せするしかありません。

本書を、信に生きた今は亡き父千葉愨治と信に生きる母千葉由紀子に献げることをお許してください。彼らは昭和の厳しい時期に内村鑑三の弟子塚本虎二先生に聖書を学びそして道正安治郎先生の春風学寮に寄宿し、父の数年の応召を経て戦後お二方の仲介により結婚しました。その後宮城古川にて家業の木材業を営むかたわら眞方敬道先生のご指導を家族でいただきました。子供の頃兄姉妹七人で母から日曜学校で「土台はしっかり建てましょう」と塚本訳聖書で譬え話を聞くのが好きでした。とはいえそのあとの縁側でのおやつがもっと好きでした。

本書の構想は父母から自然に与えられた宿題に遡ります。その宿題は内村以来三、四代かけての真剣に取り組まれたものでした。内村は言います、「旧約は新約を似て解すべし、新約は羅馬書を似て解すべし、羅馬書(ローマ書)は其の第三章二一節より三一節までを似て解すべし、神の黙示に由り羅馬書第三章二一節より三一節までを解し得し者は全聖書を解し得るの貴き鍵を神より授けられし者なりと信ず」(『聖書の研究』172号(1914))。父母の歴史は私には与件でしたが、クラーク先生の訪日なしに私は存在しないことを含意します。その岸辺に恐竜の足跡を探し、また葦に隠れて天父を仰いだ若き内村が逍遥した茨戸川の岸辺に住み、毎朝あのペケレットの森と残雪残る凜とした山並みを見ながら今は亡き犬ベルと散歩しました。内村以来の宿題を一世紀という長い歳月が流れた今ようやく提出です。人々が宝のように受け継いできた、常に魂を刷新せずにはいない人類の諸古典に四〇年以上ものあいだ埋もれることができた環境にただ感謝し、また、今日に至る研究の蓄積への love (respect) and hatred relationship のなかで、一級の人文学書は同じ心魂を持つ者には誰にであれ、明晰に理解しさえすれば、分かりやすく伝えうるという使命感のもとに過ごしてきました。このドンキホーテ的な夢想のなか妻美佐子に負担を強いました。彼女の支えなしには本書を完成しえませんでした。パウロの「誰にも何も負うな、互いに愛することを除いて」を思い返します。妻にもこの対偶が真でありますように(愛があれば、依存は許容される!?)。譬、彌平、眞理の子供たちには眞理を愛する姿を少しでも後姿にて伝えることができたならと思います。苦難のなかにも不屈な思いが湧き上がり日本と世界にいつの日にか悪に終わりが来ますように、喜びと平和の日が人類に来ますように。

最後に、趣味を語る逸脱をお許してください。本書執筆のあいだしばしば the last puritan と「バッハが信じる神を信じる」とも言い伝えられる Glenn Gould によるバッハを聴いていました。矢のように鋭い揺ぎないテンポの明晰さはアリストテレスを連想させます。ゲールド的としか譬えようのない静謐で透明な一音一音のサトルな連なりに、アンセルムスを思い浮かべます。一音、一音とともに作品全体が主人公であり、魂の刷新(Erneuerung der Seele)に音楽の本質を求めたバッハそのひととともに、理想の聴衆とそのかなたのなにもものかに捧げられており、心奥からの音への捧げだけが聴き届けられる音の確かさは、福音の確かさに身を捧げたパウロのテキストを思い出させます。彼やバッハが音においてそれを求めたように、肉を破ってただことからそのもの前で端的な明晰性の

なかにありたいものです。なによりもエルゴンの一挙手一投足にその明晰性が宿ることを望みます。

揺ぎない乾いた音の晴朗さ、宇宙の調え運ぶゲールドのバツハかたわらに、
ロゴスの真求めて仰ぐこの破れ身に、天来の光三条射し入る

(1997.10.4,1999.8.15,2012.10.18)

2017年(宗教改革500年)札幌の春暁の光のなかで

回心記 (1998年9月)

1984年2月になったばかりの寒い夜に三田のアパートで回心を経験しました。10年生活した春風学寮は改築のため、退去していました。追い詰められ、絶望的な状況のなかで、「信じます」と心の底からはじめて告白しひれ伏したとき、私の内奥が暗黒から光明へ、苦悩から平安に次第に別の世界に移される経験をいたしました。それは「御霊の呻き」と題して「おとずれ 64 特集 関根正雄先生伝道50年」(2000.1)に掲載いただきました。この際、回心後10数年たってから回顧したその文章をここに記します。

「御霊の呻き—覚書—」

この夏[1998]のある日の午後、ふと手にした哲学書の背表紙の内側に1984年6月10日と記された自筆の文章を見出した。

こうゆう夜は愛する人とそこはかたなく語りあいたい。日曜の深夜、雨がシトシト降り、道ゆく車も数少なく、バッハのパーティータが軽やかに聞こえてくる、こんな夜。ギリシャ教父のお話しもとっともうまくでき、関根先生とも八時間もともにおり、エクレスシアにつらなる喜び、一人ではないという喜び、公的に神の民に属しているという喜び、私の一挙手一投足がエクレスシアの故に神の国の前進の戦いに参与しているという喜び。私の生が無意味ではないという喜び。

この鉛筆書きに触れ、記憶の小箱が開けられたかのように、そのころの思い出が甦ってきた。その冬のある夜を境にして、その後日記には毎日のように「平安」「平安」という字が通奏低音のように書きつけられ、「ああうれしわが身も主のものとなりけり」(賛美歌 529 番)が自づと口をつく日々となった。その夜は私の新生の時となった。その当時の静かな喜びの感覚がそのまま甦ってきた。1983年のある晴れわたった秋の日、関根正雄先生から一枚の葉書を頂いた。森有正から教わったというアウグスティヌスの言葉が引用されていた。「誤った広い道を大手を振ってのし歩くより、正しい小道を足をひきずりながらトボトボ歩くほうがはるかにまざる」。関根先生の千代田無教会集會にコンスタントに出席するようになって8年、28歳の秋私は将来の何の見通しもなく、哲学の研究を大学院で続けながら、己の罪との苦闘を強いられていた。こびりつく悪さの感覚、人生をまっとうできないという不安、愚かさに対する失望、最後のところ何も確かなものはないというニヒリズム。私は当時このような自分なりの現実を背負って、人生に前と後ろがあることも知らずに、あてどなくトボトボと足をひきずりながら歩いていた。

年があらたまり1984年の2月になったばかりのある寒い深夜、私は平伏して、生まれて初めて心の底から、追い詰められ他に逃れ場のない苦しみの中で、呻きつつもハッキリとした声で「信じます」と応答した。その時、胸の奥の心の底が抜け、聖霊としか言いようのない何か確かな平安がその穴のあいた心の底から全体にじよじよに広がっていくのを経験した。パウロの「すべての人の思いにすぐる神の平安」が出来事になった(「ピリピ」4:7)。その時から、『聖書』が自分の書になった。パウロの書簡や詩篇、イザヤ書が自分で書いたように理解できるように思え、いたく驚いた。霊の言葉は霊によってのみ理解される。『聖書』がそれによって書かれている同じ霊に触れたことがほどなく理解された。そこを掘ればいつも恵みが泉のようにわきあがる場所を見出したと言える。これは恵まれた体験であり、それまでの混沌とした生から抜け出し、新しい生のはじまりであった。そしてその静かな喜びは「古典への招待—聖書の場合—」という連載作品を生み出した。今でもあの作品の一行たりとも喜びなしに書かなかったことを覚えている。先生は一年後、留学のご挨拶に伺うと、「あれは神学的回心だったと思う」と感想を述べてくださったのは、「古典への招待」をお読み頂いたことと無関係ではないと思う。しかし、何故にか「古典への招待」においてはその夜のことを書くことはできなかった。アウグスティヌスは回心の経験が探究の出発点となり、自ら体験したことのロゴスを自己の探究という仕方で紡ぐことになったが、私にとってもこの世界に確かなものがあるというだけで喜びであるそのような体験であったが、自分において出来事になったことが何であるかをロゴスとして捕らえるには相応の時を必要としていたのであろう。ルターやバルトも汲めども汲み尽くしえない恩恵の泉を生涯かけてロゴスに代え、その上に生を築いていったのであろう。ルターは「聖書のすべての箇所は無限の理解に対して開かれている」と言う(WA.4.318,40)。

今、あれから14年半が過ぎ、あの日の出来事をふりかえると、あれはエクレシアのなかにおいて起こった出来事であったことが理解される。集會に連なり日曜ごとに関根先生の聖書講義を拝聴した。先生のお話しは若い定まりなき心には、時に新鮮な感動をもって、時に激しい神の怒りの言葉として迫り、日常の生において最大の関心と規範とならざるをえない仕方では集會が私の心を占めていた。あの日々なしに私にあの恵みが与えられたかどうかは、疑わしく思っている。少なくとも、自己と他者をごまかし、神にも偽りであり、あわれみを知らず定かならざる生をしばらく続けていたであろうことは、ほぼ確実に言えることである。今となって、集會に通った十年がどれほどの恵みであったか、その後の生において大きな財産となっていたかが、はっきり認識される。

先生の著作集第一巻に『聖書の信仰』と題される、月刊誌『預言と福音』の1950年5月から1979年6月までの巻頭言を集めたものがある。これを私は繰り返し拝読するが、この夏一つの発見をしたように思える。一文一文がほとんど人間が語りうるギリギリのところから凝縮された形で述べられ、一言一句おろそかに詠むことのできない文章の集まりであるが、先生の言葉のほとんどすべてがある特別な場所から紡ぎだされているように思われた。それはキリストの十字架の低さと言ってもよいが、よりの確には御霊の呻きにあわせられて言葉が生まれてくるように思われた。そこから生きることと苦しむことの重ねられることの多い先生の文章を拝読するとき、よく理解できるように思われた。それに思い当たった後に著しい言葉に出会った。「真剣さ」という巻頭言(1968.10)の最後に「御霊の呻きの執り成しこそわたくしにはすべてなのである」と述べられていた。常に明晰で曖昧さのない文章の集まりのなかではあるが、これほど断定的にご自分の「中心的な信仰の支え」(『著作集』20巻422頁)に関して述べて折られる箇所を他に見い出すことはできない。先生におかれては「御霊の呻きの執り成し」が真実にすべてであったのだと思われる。それはつとに「矛盾」(1952.8)や「御霊の呻き」(1954.3)に明確に見られる。

ルターには「神の義」が彼の信仰把握の中心点であった。ルターは『ローマ書』1章17節について「わたしは昼も夜も思索していたが、ついにわたしはそこで神の義を、義人が神の賜物によって生きるところの、すなわち、信仰によって生きるところの義として理解し始めた。・・・ここでわたしはまさに生まれ変わったように感じた。そして開かれた門を通してまさに天国に入ったように感じた」と述べている(WA.54.186.3)。そのように、関根先生には「御霊の呻き」が中心点であるように思える。先生は三巻にわたる『ローマ人への手紙講解』のあとがきを「朝な夕やめきに答えみ霊なるみ神この身に満ち給うなり」という歌で結んでおられる(『著作集』第20巻430頁)。私の恵みの体験は、実は日曜ごとに先生が御霊の呻きにあわせられて聖書の講義をされているなかで、起こったことだったことが伺える。

確かに私はあの時、自分に絶望し破滅以外にない自分なりのどん底に落ち込んでいた。日曜ごとに、イエス・キリストが神に見捨てられ、激しい神の怒りを受けて十字架上で死んだことと、十字架上のイエスにおける神のなさ、低さにわれわれがあわせられる時に信仰が神のまったき恩恵として与えられることが語られていた。神の愛と神の義が集中している究極の場所が十字架である。「エリ、エリ」のイエスの叫びは御霊の呻きであり、その時御霊により父なる神に執り成しが行われていたのであった。私も、他にすがる場所のない一番低いところに落ちた時、私の呻きは御霊の執り成しの言葉だったのだと思う。なによりも義なるイエスの十字架の低さにあわせることが御霊の呻きによる執り成しであると言えよう。なにであれ苦しいことがあり呻く時、そのただなかに御霊の呻きの執り成しを聞くことが、信じることであるとも言えよう。苦難や悲惨や罪のあるところ、そこにキリストは御霊として共に呻いてい給う。そして十字架のイエスは復活の主であり給う。被造物全体が呻き、そして御霊の実を持つわれわれも呻き、そしてそれらの呻きのただなかに「御霊みずから、言葉にあらわせない切なる呻きをもって、わたしたちのために執り成して」おられる(『ローマ書』8:26)。これは福音である。喜びの音信である。

最近、集會の量義治先生が1972年に御霊の呻きの執り成しにおいて回心された報告を拝見し、時を貫きエクレシア全体において御霊が分かち与えられていることに深い感謝を持つ(量義治『無信仰の信仰』59頁)。そのことを或るひとに話すと、「関根パラダイムのなかで回心が起こるのだね。祝福されたことだ」と応答したが、まさに祝福されたことだと思う。被造物全体が贖われることを求めて呻いている、この人類史上最も難しい時代に、その呻きのただなかに御霊がともに執り成してい

てくださるとは、なんと感謝すべきことであろう。1998年9月24日 千葉恵〔註、森有正の典拠についてはアウグスティヌス『省察と箴言』ハルナック編、服部栄次郎訳、岩波文庫 272 頁参照。「古典への招待 I-IV」(1984-1985)は北大図書館電子レポジトリ HUSCAP により閲覧いただけます。URI は以下です。<http://hdl.handle.net/2115/16875> 〕

1984年冬の回心以降も魂の未耕作さは否定しがたく、変わらず転びつまるびつしつとも、具体的な恩恵をいただき、憐れみのなかで学究の道を歩みました。1985年春紹介状一枚もって、会話を交わした知る人一人だにいないアリストテレス哲学研究のメッカ Oxford 大学に武者修行にでかけました。

『信の哲学』パンフレット 紹介、推薦文、書評

著者略歴

千葉恵(ちばけい)1955年宮城県古川市生。1977年慶応義塾大学法学部政治学科卒。1977-1984年同大学院文学研究科哲学専攻、修士課程を経て博士課程単位取得退学。1984年同文学部非常勤講師(古典ギリシャ語)。1986-1990年オックスフォード大学人文学科哲学専攻、修士課程を経て博士課程修了、哲学博士(D.Phil in Philosophy)。1990年-現在 北海道大学大学院文学研究科助教授を経て教授。

主な著書論文 Aristotle on Explanation: Demonstrative Science and Scientific Inquiry (Oxford University D.Phil Thesis 1989). 『アリストテレスと形而上学の可能性—弁証術と自然哲学の相補的展開—』(勁草書房 2002)。「『ロマ書』におけるパウロの意味論—ピステイスの二相—」月本・大貫編『日本の聖書学 第八号』(NTD/ATD 聖書註解刊行会 2003)。Aristotle on Essence and Defining-phrase in his Dialectic, *Definition in Greek Philosophy*, ed.D.Charles (OUP, Oxford 2010)。Aristotle on Heuristic Inquiry and Demonstration of What It Is, *The Oxford Handbook of Aristotle*, ed.C.Shields (OUP, Oxford 2012)。Uchimura Kanzo on Justification by Faith in His *Study of Romans--A Semantic Analysis of Romans 3:19-31, Living for Jesus and Japan-The Social and Theological Thought of Uchimura Kanzo*, ed.H.Shibuya and S.Chiba (Eerdmans, Michigan 2013)。

本書の紹介

本書において私は使徒パウロの福音宣教がどれだけ哲学的吟味に耐えうる神学説を展開しているのかを探索すべく、アリストテレス哲学を一つの共約性規準(共通尺度)として立て、「ローマ書」の意味論的および心身論的分析に従事しました。ひとは信じる者もそうでない者も誰であれ同じ言語(翻訳関係含む)と心身を持っているという道理ある前提のもとに、矛盾律を最も基礎的な共約性規準に据え、ひとつひとつ共通尺度の適用の拡張可能性を吟味しました。パウロ書簡で語られる「神」は言語使用者であり何らかの意味論のもとに言語行為を遂行し、その認識や判断がパウロにより報告されているという、道理があり、共約されうる仮説を本書は書簡解釈の基礎に立てます。「神は彼らを恥ずべき情欲に引き渡した」というパウロの報告において、「恥ずべき」は引き渡された当人ではなく、まず神によりその語において理解される神の前の現実が指示されています。

パウロは福音の伝達において、この神の前とひとの前の次元の分節と総合を「ロゴスとエルゴン(理論と実践)」により遂行します。彼はロゴスとエルゴンの相補性のなかで「或る部分大胆に書いた」と自らローマ書結論部で記しますが、彼がこの書簡の或る部分(信仰義認論(1-4章)と選びの教説(9-11章))においては、「霊と(神の)力能の論証」を試みることなく、聖霊の働き(エルゴン)を括弧にいれ、聖霊に対する言及なしに「知者たち」に理性のみにて理解されるよう「知恵の説得」を大胆に試みています。

アテネのアゴラで「毎日、哲学者たち」と議論を重ねたパウロは自らの神学的主張の背後に、自ら信の哲学者として哲学的分析を許容する仕方で宣教に従事していたことを本書は摘出しました。彼は「イエス・キリストの信を媒介にして」(3:22)神の義が新たに啓示され知らしめられたと神の前の

出来事を報告しますが、神は自らひとに対し信に基き義であるというこの福音を中心にそれぞれ無矛盾で整合的な言語網を五層展開しています。異邦人伝道に従事するパウロが「汝らの肉の弱さの故にわれ人間的なことを語る」その人間中心的な言語網をも展開するなかで、神中心的な神の前の自己完結的な言語網とひとの前の相対的自律性の言語網が析出されます。彼はそれらを媒介するものとして聖霊の働きを位置づけます。パウロは神の前における義人とは「イエスの信に基づく[と神に看做される]者」そして罪人とは「業の[モーセ]律法に基づく[と神に看做される]者」のことであると一般的に啓示により知らされていると主張します。個々人には二つの啓示の媒介ほどには誰にも明晰に知らされていないため、自らの信が神にイエスの信に基づくと看做されていると信じることは実質的なこととなります。彼は「汝が汝自身の側で持つ信を神の前で持て」と命令形により、自律した行為主体に懐疑や不信仰を乗り越えるよう励まします。無矛盾な諸言語網を展開しているという意味において、パウロは「信以前の理解」のモットーのもとに展開する信の哲学の先駆者でもありました。パウロは、神の前の義人と看做されるべく、ひとがその備えとしてないう人間の本来的な生、永遠の生命を構成するものは、心魂の根底に信が生起し、信に基づき希望のうちに愛の道を歩む限りにおいて実現されることを最終的に誰にも共約されうるものとして論じます。

意味論的分析の一つの成果として、本書は人類に最も多く読まれた書物の神学的主張の中心箇所(Rom.3:22)における「(神の義とその啓示の媒介であるイエス・キリストの信に)分離がない」を、ヒエロニムス以来「(信じる者のあいだに)区別がない」と一様に誤訳されてきたと主張します。この誤訳がその後のヨーロッパにおける神学そして哲学の諸論争とさらには政治的な争いの歴史の一因となったと論じ、和解案を展開します。

最後に、本書の北海道大学出版会からの刊行にさいし、北大の前進札幌農学校出身の内村鑑三による100年前の予言を紹介しておきましょう。「旧約は新約を以って解すべし、新約はローマ書を以って解すべし、ローマ書はその三・二一より三・三一節までを以って解すべし、神の黙示に由りローマ書三・二一より三・三一節までを解し得し者は全聖書を解し得るの尊き鍵を神より授けられし者なりと信ず」(1914.11,全集 21 卷 113 頁)。

『信の哲学』パンフレット推薦文

革命的な発見

上沼昌雄 (聖書と神学のミニストリー代表 神学博士)

アリストテレス哲学の魅力はロゴス(理論)とエルゴン(実践)の「共鳴和合」即ち相補性の展開にあるとして、自然学、形而上学、魂論の様相分析を試みる千葉恵教授が、時至って形成された新約聖書のなかの「ローマ書」での使徒パウロの神の福音の提示にもロゴスとエルゴンの共鳴和合が成り立つとする、『信の哲学—使徒パウロはどこまで共約可能か』の革新的な展開に目を見張る。その具体的な手法としての意味論的分析によるローマ書における「神の前の自己完結性」(1-4章)と「ひとの前の相対的自律性」(5-8章)を分節し、さらにその総合を企てる。前半の中心である3章22節での「イエス・キリストのピステイス(信)」を「帰属の属格」とし、さらにその「イエス・キリストの信」を媒体とする「神の義」の啓示のゆえに、神における信と義の「分離のなさ」は、革命的な発見である。ピステイス(信)は、神のピステイス(真実)、イエス・キリストのピステイス(信実)、そして人のピステイス(信仰)と展開される。その「信」を心魂の奥底での根本的あり方、即ち、認知的側面と人格

的側面が相補的に機能しているとして、ローマ書7章8章を中心に提示する心身論は、アリストテレスの徳理論を超える「信の哲学」の存在理由といえる。

神学的前提を取り払ってのローマ書のテキストのひたすらな意味論的分析は、歴代の注解書、神学書にはない希有な現実感をもたらす。それは翻ってパウロ以来の神学的「アポリアを美しく提示する」ことで、アウグスティヌスのペラギウス論争、アンセルムスの神の存在証明と贖罪論、ルターの信仰義認論とトマスとの相違、カントの理性批判とハイデガーの本来性と非本来性の理解への歴史的挑戦となる。西洋思想とキリスト教思想に変革をもたらす千葉教授の渾身の書であり、西洋思想とキリスト教思想に関わる人の必読の書である。

パウロ研究を切り開く渾身の論考

大貫隆（東京大学大学院総合文化研究科 名誉教授）

キリスト教文化圏では古今東西を問わず、哲学と神学、理性と信仰の間に深い溝が横たわってきた。千葉恵氏の本書はその溝に架橋を試みるきわめて野心的な論考である。そのために理性の側では氏の研究上の出発点であるアリストテレスが、信仰の側ではイエスと並んで新約聖書の中心を成すパウロが選ばれる。

私の見るところ、著者による両者の関連づけで最も生産的と思われる点は二つある。一つは、アリストテレスのデュナミス(力能)とエネルゲイア(実働)の理論に基づきながら、ローマ書におけるパウロの発言に複数の言語身分(特にエルゴン言語とロゴス言語)が区分されることである。もう一つは、アリストテレスの心魂論、とりわけヌース(叡知)論と照らし合わせることで、パウロにおける「ヌース」の重要性を明らかにしていることである。アリストテレスによれば、「ヌース」とは「接触的認知能力」である。事実、パウロによれば、信仰とは「心魂のボトム」が神からの霊に「触れたとき」に成立する。その成立そのものの言い表しは「エルゴン言語」となる。しかし、そこで成立した認知の中身が命題として言明されるとき、それは信仰か無信仰かの別を超えて「真」であることの承認を、つまり「共約性」を求めるものとなる。著者はパウロの言明の分析にあたって独特な記号化を試みるが、そこには現代の英米哲学(分析哲学)が強く意識されている。現代哲学の論点と方法への目配りはその他にも随所に認められる。まさに渾身の論考と呼ぶに値する。

最後に、本書がパウロの書簡の中でも特にローマ書に焦点を絞ったのは偶然ではない。他の書簡と異なり、ローマ書はパウロが生涯の終わり近く、自分の信仰と思想を組織的に言明した文書だからである。その特性を前記の意味でのヌース論と「共約性」の観点から論証しようとする研究は、これまでの神学の側でのパウロ研究にはほとんど見られなかったものである。欧米はもちろん、日本においても、パウロ研究の蓄積には実に分厚いものがあるが、本書がその中で新しい領域を切り拓くことは間違いないと思う。

長年の真剣で、詳細かつ概念上洗練された考察

David Charles (Department of Philosophy, Yale University)

‘The Philosophy of Faithfulness’ is clearly the product of many years of serious, detailed and conceptually sophisticated reflection on Paul’s Epistles, especially his Epistle to the Romans. Kei Chiba uses his considerable expertise, developed as an Aristotelian scholar, to detect differing levels of analysis in Paul’s writings and to offer, on this basis, a strikingly original understanding of several key Pauline concepts. His approach merits, and will repay, careful attention.

『信の哲学』がパウロ書簡とりわけ「ローマ書」をめぐる長年の真剣で、詳細かつ概念上洗練された考察の産物であること、それは明らかである。千葉恵は、アリストテレス研究者として発展させた彼のかんりの専門的知識を用いて、パウロの論述における分析すべき異なるレベルを洞察しそして、それを基礎に、幾つかのパウロの鍵概念についてストライキングなほどに独創的な理解を提示している。彼の接近視角は、注意深い研究に値しそしてそれに報いることであろう。

勇敢な思考の冒険の書

中畑正志（京都大学大学院文学研究科 西洋古代哲学教授）

すでに一五年ほど前のことになるが、千葉さんの助力もあって私がオクスフォードに滞在しているときに、千葉さんがわれわれの借りていたフラットを訪ねてくれた。夕食後、ワインなどを飲みながらしばし閑談を楽しんだが、千葉さんとの間では話が真面目な方向に傾いてしまうのがつねであり、そのときもそうだった。ただし、そのときの話題の中心は、アリストテレスではなく、パウロの理解についてブレイクスルーがあった、という千葉さんの告白だった。いま思い起こすなら、その時の千葉さんの表情に宿っていたのは、喜びや満足というより、これを多くの人に理解してもらわなければならない、という決意のようなものだった気がする

千葉さんがそのようにして新たに開拓した思考の集大成が、本書である。つまり、ある開眼があったから、その思考をたしかな言葉に定着させるのに、千葉さんはさらに多くの年月と労苦を要したことになる。まさに本書は、千葉さんの心血を注いだ作品である。

率直に言えば、アリストテレスに関して、千葉さんのテキストの読み方に私が同意できないところは少なくない。またパウロについては、プラトニズムやストア派と関係などから多少関心をもっているだけで、私はほとんど無知であることも告白しなければならない。しかし本書は、そうした読者の予備知識とかかわりなく、著者の知的気迫を真っ直ぐに伝えてくれる。ここで問われているのは、信仰が内含する哲学のあり方であるとともに、理性的思考の形而上学的、倫理的、美的可能性でもある。日本では希に見る、勇敢な思考の冒険の書だ。その完成を心から慶びたい。

カトリックとプロテスタントの和解へ

Kevin L. Flannery, S.J. (Pontificia Universitas Gregoriana イエズス会士)

Kei Chiba is a scholar committed to the truth; he is also a man of peace. His hope is to reconcile the standard Protestant and Catholic interpretations of St. Paul. He may very well have succeeded.

千葉恵は真理に捧げた研究者である。彼はまた平和のひとでもある。彼の望みは聖パウロについてのプロテスタントとカトリックの標準的な解釈を和解させることである。彼はそれをとてもうまく成し

遂げていることであろう。

従前の神学の枠組みを超える

水垣 渉(京都大学名誉教授、キリスト教学)

昨年はルターによってはじめられた宗教改革 500 年の記念すべき年であった。そのルターは彼より 1500 年ほど前のパウロ、特にパウロの「ローマ書」の衝撃によって開かれてきた信仰の新たな経験から宗教改革に至った。それによって今からいけば 2000 年に及ぶ、著者が「信」と呼ぶ信仰の歴史を革新した。しかしこの歴史は、宗教改革の地盤であった西洋のキリスト教だけでなく、世界の政治や経済、文化に至る人類のあらゆる状況にかかわってきており、多くの戦争や文明間の軋轢とも無関係ではないから、ローマ書の解釈は神学の専門的な研究の枠内では扱えない巨大な課題となる。哲学者である著者は、ローマ書を言語分析の視点から解釈しなおし、パウロの議論がアリストテレスの哲学と共約的であることを示して、一般にパウロの「神学」と言われているものが、そのロゴスの根底において「信の哲学」であることを示そうとする。私には哲学を論じる資格はないが、著者はそれに成功したと思われる。

私がいくらかかわりのある神学に関して言えば、著者の挑戦的な試みには、従前の特定の神学の枠組みを超える意義がある。これまでの神学内諸論争を解決する糸口を見出ただけでなく、キリスト教信仰に立つ神学が自らの将来を開いていく可能性をも提示しているからである。しかも、その可能性はすでにパウロの「信の哲学」にあった、と著者は主張する。私が著者に最も感謝するのはこの点である。ただ私は著者と対話するには年を取りすぎた。残念極まりない。本書に多くの対話・対論の士が出現することを切に願う。

書評 (抜粋)

Zenon Culverhouse (Stanford University ゼノン・クルヴェルハウス スタンフォード大学)
「アリストテレスのソクラテスに対する負債は詳細には稀にしか議論されないので、千葉恵(第六章)のアリストテレスの句 *to ti ēn einai* 「何であったか」のソクラテス起源をめぐる論文はとりわけ歓迎されるべき付け加えである。この句の意味をめぐる学者間の同意は、とりわけそれが未完了過去 *ēn* 「あった」を有意味なものとするさいには、ほとんど見られない。千葉は、アリストテレスが自らの先行哲学者に見た欠陥に対する応答において展開した自らの弁証術においてその句の役割を考察する。千葉はその句はソクラテスの当初の問い「F とは何であるか」においてソクラテスが探していた応答の種類を特定すると提案する」。(Definition in Greek Philosophy (OUP, Oxford 2010), ed.D.Charles, Cambridge Journals Online, 2012.12.12). (2013.02.08)).

久下倫生 (日本基督教団マラナ・タ教会牧師、KDK 神学会代表、工博、医博)

「人を嘘つきにするほどの古典を読みたい」

読書は想像力を刺激する。特に良い本であれば、物語やファンタジーに限らず、お堅い哲学の本でも、科学書でもそうである。わたしは、ずっと研究開発の仕事に取り組んだ理系人間なので、教会の方があまり読まないニュートンや、アインシュタインの本に感動し想像をたくましくした。ロケッ

トに乗って宇宙を飛び回ったり、時間の壁を越えてタイムマシーンに乗ったりした。そういう経験を他人に話すと、わたしは嘘つきになってしまった自分に気づく。まるで、ほんとうに旅したかのように話してしまう。良書は人を病的嘘つきにする傾向がある。この病気に冒されると、新聞やテレビは実にはぼからしくなってしまう。三十歳の誕生日以来、新聞を定期購読したことはないし、テレビは結婚してからずっと持っていないので、最近のホットな話題にはついていけないが、困るのは魚のあらを捨てるとき包み紙がないことだけである。

これだけなら、妄想好きの変人で済むのだが、世界を変えたダーウインの『種の起源』を、想像力を使って牧師や熱心な信徒に紹介すると、お前は聖書を信じない無信仰な人間だと断じられることがほとんどで、ちょっと困った。・・

本には絶対読まねばならない本、読んだ方がいい本、どうでもいい本、読まないほうがいいものもあるが、たいていは読みやすい本、読める本だけを読む。古典を読まず解説本を読む。反省している。最近、ものすごくいい本に出会った。『信の哲学』、千葉恵著、北大出版会。革命的内容である。ものすごく想像力を刺激される。大著かつ高価であるが、仲間には勧めている。絶対読まねばならない本だが、『種の起源』になるかもしれない（「本の広場」1March2018 巻頭言（財）キリスト教文書センター）。

他 佐々木啓 書評『『信の哲学—使徒パウロはどこまで共約可能か—』』（『基督教学』54号 2019）
（『信の哲学』の方法について—佐々木啓氏の書評への応答—北大文学研究院紀要 159号、
（2019.12））

荻原理 書評『『信の哲学—使徒パウロはどこまで共約可能か—』』（『哲学』第54号 北海道大学哲学学会 2020）（「特集：千葉恵『信の哲学』 荻原理『『信の哲学』における信の根源性をめぐって—マクダウェルの道徳心理学を念頭に措きながら—」、千葉恵「アリストテレスの倫理的実在論」東北大学倫理学研究会編『モラリア MORALIA』29号 2022）

賢者に憧れて一千葉先生に「徳」を学んだ日々

木浪(土谷)志帆

1. 回想

わたしは「賢者」に憧れる子どもだった。日々童話を読んで憧れを募らせ、自分もなりたいた願うようになった。たまたま読んだ数冊の童話では賢者は年寄りだったことも、何事にも時間がかかる自分には都合が良いと思った。年寄りになるまでには数十年の猶予があるから、多分なんとかなるだろう。

そんな憧れが遠因となって哲学科に入った。哲学科の先生たちの語る言葉は難しかった。千葉先生の言葉も立ちはだかる壁のようではあったが、学生たちを池のそばに連れ出して、おもむろに脱いだ靴を高く掲げ、「この靴も、水も、木々も、空も、全てを数学で説明できると考えたのがピタゴラスです」と言ってくれる暖かい先生だったので、学生を見守ってくれるだろうと思って担当教官になっていた。その時、「師弟関係は一生ものです」というありがたい言葉をいただいて、20年が過ぎた。

哲学研究から離れて10年経つ。その間に千葉先生は『信の哲学』を書き上げられ、わたしの興味がありそうな題材の論文を発表する際には連絡を下された。そして今回、学生時代の思い出話を交えて、思ったことを叙述して良いと言って下さった。

2. 行為選択時の「葛藤」

キリスト教を教える中学校で、キリスト教への信仰を持つ人たちに会った。キリスト教の授業があったが、中学生には、授業内容よりも、イエス・キリストという模範を持っている人たちの、行為選択時に参照すべき何ものかがあるという余裕がまぶしかった。ただ、道徳的行為の選択時にそれがキリスト教を離れても良い行為なのかわからないという疑問を投げかけると、それが良い行為でありますように、お導きがありますように、という祈りとして投げ返されてしまうことがあり、それは信仰がない者には不服だった。

信仰がない人と信仰がある人の良い行為の違いはなんだろう。人間である限り、良い行為は何かしら共通のはずだが、「良い」と多数の人たちが認める実例を鑑みて自分なりに良い行為を選べば良い人間になるのか、信仰を持って、その宗教上で良い人、つまりキリスト教ならばイエス・キリストの背中を追いかけの方が良い人間になるのか。

わたしがぼんやりと疑問を持っていたのは徳についてだったのか、と思ったのは、大学で『ニコマコス倫理学』の説明を受けた時である。疑問が的確に形になった、その嬉しさを覚えている。アリストテレスは、魂が良くあることを幸福ととらえている。つまり、人は徳を涵養する、すなわち適切な行為選択を可能にする魂の態勢を育むことで幸福を目指す。ではどのように、そのような魂の態勢は育まれるのか。

わたしは自分も覚えのある、行為の「葛藤」を手がかりに、アリストテレスの適切な行為選択に関する議論を読もうとした。そして、節制ある人には葛藤がない、ということが理解できずにしばらく困っていた。快樂と苦痛に対する反応を基準に、「肉体的な快樂を差し控え、そのこと自体に喜びを感じる」のが節制ある人、それを嫌がる人が放埒な人、快樂に打ち勝つ人が抑制のある人、快樂に打ち負かされるのが抑制のない人である(*Nic.Eth.*II3.1104b5-6)。抑制のない人と抑制のある人は行為選択時に葛藤がある。葛藤は、快樂を伴うが不適切な行為選択肢がありうるなら必ず生じ、葛藤がないままに選ばれた正しい行為は、結果的に正しいだけではないか。

千葉先生の翻訳で、この点はクリアになった*。アリストテレスは、有徳な人において行為選択肢を提示する「実践知」と、抑制のある人において推論の形式で行為選択肢を提示する「科学的知識」を使い分けていて、有徳な人にはそもそも葛藤を生む推論の形式では行為選択肢が提示されない。有徳な人が抑制のある人と話し合ったとする。抑制のある人が、この状況下では科学的知識から始まる、適切な行為選択肢を結論とする推論と、欲望が主導する、不適切な行為選択肢に至る推論や意見がありうると説明したら、有徳な人はそのふたつを理解し、そこには葛藤が生起すると認めるだろう。それぞれがひとつの状況に対する別の行為選択肢を提示しているからである。しかし同じ状況下で、有徳な人、この場合はすなわち「実践知を保全している」(VI5.1040b13)節制あ

る人には、「欲求的叡智」(VI2.1139b4)として行為選択肢が認知される。これは人を行為に至らしめる認知の成功した例であり、選択肢はひとつなので、葛藤は起きない。

3. 「教示」と「習慣の積み重ね」

行為選択に関わる魂の態勢はどのように育まれるのか。アリストテレスが魂の良い態勢である徳として挙げるのは、人格徳と認知徳である(II1.1103a5)。人格徳はパトス、すなわち身体的なもの、感情や欲求に対して「良い態勢にあること」を指す(II5.1105b25)。怒りがある時に、激しく、あるいは散漫に怒らず、「中庸に」怒るのが良い態勢である(II5.1105b26)。行為選択におもに関わるのは人格徳だろう。ただし行為選択が「思考的欲求」(VI2.1139b4)、成功した例は「欲求的叡智」とも表現されるように、選択には何らかの理が必要である。この理の把握に関わるのが魂の認知的な働きであり、認知徳は魂が真理を捉えている状態で、知である。認知徳は、技術知、科学的知識、実践知、叡智、知恵の五つとされている。

認知徳は主に教示によって、人格徳は習慣によって育まれる。中庸の行為を繰り返して、人格徳は発達する。抑制ある人や節制ある人の行為は、「理無き」自然的なパトスが「何らか理に与る」、パトスが理に聴従することで選択されている(II3.1102b23-25)。これを、人格的態勢が認知的態勢に与る記述であると先生は書く。態勢が中庸に近づくにつれ、理に与る力能が成長していく。また、行為選択肢の知識が発動し、適切な理を得れば、それに聴従して態勢は中庸に近づく。行為選択肢の知識であり、認知徳である実践知は、人格徳と「共に軛に繋がれている、いやしくも実践知の諸原理はさまざまな人格徳に即しており、人格諸徳の適正さは実践知に即している限り」(X8.1178a16-19)。行為を通じてパトスに対する態勢を成長させることで行為選択肢の知識を蓄え、その知識に与ることで適切な行為を選んで人格徳を育む、そのような形で、実践知と人格徳は同時に働いている。

選択の成功した例として、「欲求的叡智」という表現があった。選択一般の表現は「思考的欲求」で、成功した例とは区別があるが、「理」と「欲求」の組み合わせであることを共有している。選択があつて人は行為に至るが、「選択の原理は欲求と何かのための理である。それ故に、叡智及び思考なしに、さらに人格的態勢なしに選択は存在しない」(VI2.1139a32-34)。パトスに対する態勢があつて欲求が生まれ、欲求は人格的態勢が与っている理の目的を目指している。「欲求的叡智」も「思考的欲求」も、理と態勢を要素に持つ点では同等であり、ただ選択の力点が異なる。人を行為に至らしめる「認知」か、何らか行為の目的を設定された「態勢」か。これも人格徳と実践知が同時に働くがゆえの表現だろう。有徳な人においては、人格徳に即して欲求的な叡智が発動する。

4. 「賢者」の言葉

千葉先生のおかげで、有徳な人が行為選択における理想の人物像であることを細やかに語るアリストテレスの講義を聞いたことがとても嬉しい。

賢者への憧れは変わらない。しかし賢者になりたいという願いは、古代ギリシャに徳について語った哲学者がいたことをありがたく思う気持ちへと変わった。憧れの賢者アリストテレスの言葉を聞かせてくれた先生に、心から感謝している。

*千葉恵「アリストテレスの倫理的実在論」『MORALIA』(東北大学倫理学研究会)第29号2022年

「アリストテレスの意味論－既知及び未知なものを包括する－」 感想

2022.1.19 浅香力

未知者の探求が語られる『分析論後書』では探求の最終段階で発見される定義 S+Eは[千葉注、意味表示 S 把握の成否と「何であるか」E 把握の成否は四種類の述語づけ可能なもの(predicable)の組み合わせを持ち、S+Eはその成功した組み合わせを表示している]、既知者についての『トピカ』の眼前者の議論と同じ状況となるため、意味表示の二重機能は定義に適用することができるかと理解しました。この二重機能は『形而上学』で他の範疇の存在者に対する実体の優位性の説明のために用いられていました。『命題論』では、「声で話された言葉は魂における受動様態のシンボル[徴・代理]であり、書かれた言葉は声において話された言葉のシンボルである」(p.23)とあり、ものごとの側から、語られた言葉が何であるかが指示されていると思いました。「語る」という一つの行為が二つの機能を持っていて、そこに魂が関わること、とても興味深く思いました。信の哲学 2 章での二重の指示の理論は質料形相論と様相存在論の中で取り上げられていて、二重の指示は「形相」に向けられていますが、この論文では「ものごと」に向けられていると思いました。この違いについて、考えていきたいと思っております。

酒井氏の応答もお読みしました。意味表示の二重機能と意味表示の両義性は、やはり異なるものなのではないかと思いました。「名」や「名のような他の表現」が実在でもあるがゆえに、意味表示という場面において言語と実在が接続されるのである(酒井 p.54)。二重機能は「意味表示行為の二つの機能」であるのに対し、両義性は「名」や「名のような他の表現」が実在でもあることと理解しました。しかし「名前は時間なしの約定に即した有意味な音声(*phōnē sēmantikē*)である。・「約定(*to kata sunthēkēn*)とはいかなる名前も自然によってあるのではないが、[何かの]シンボル(代理)となる時、名前となるということである・」(p.8)とあって、名前は実在とは異なっていると思います。また「[……]言語的なものであると同時に実在するものの『何であるか』でもある」(酒井 p.53)は「名」や「名のような他の表現」が定義でもある」と言いかえられるように思います。これは「定義は「何であるか」の言表であると語られるので、「名前や名前のような他の言表が何を意味表示するか」の或る言表(*tis logos*)が定義となるであろう(*estai* [未来形は発見的探求の成功した時点を示す])こと明らかである」(93b29)、探求論の文脈でまだ定義に到達していない時点で用いられる「名前や名前のような他の言表」はその時点では、未来形で語られる定義ではあり得ないという千葉先生のご説明で、名前と定義は異なるものであると理解できました。他、「これらの議論から、「[Fは]何であるか」を(S1)意味表示している者(*ho to ti esti sēmainōn*)は時に実体を、時に性質(どのようにあるか)を、そして時にその他の述定の或るものを(S2)意味表示する(*sēmainei*)ということは明らかである。というのは、或る人が彼の眼前に置かれており(*ekkeimenon*)、そこに置かれているもの[F]は人間もしくは動物であると語られるときには、彼は「何であるか」を述べており、実体を意味表示しているからである」(p.16)、この箇所の主語が「意味表示」ではなく「意味表示している者」であることは、二重機能がその者の魂の働きであることを含意しているのではないかと思いました。意味表示の両義性では魂への言及があまり見られないように思いますがこの点も二重機能と異なると思いました。他、*horos* と *horismos* の使い分けが曖昧(酒

井 p.49)という主張や、「すべての実体は或るこれを意味表示する(*Cat.5, 3b10*)」、「いかなる種差も[……]「どのようなものか」を意味表示している(*Top.IV 2, 122b16-17*)」(酒井 p.54)への応答がどのようなものになるか気になりました。

意味表示の二重機能についてはありませんが、以下の箇所が心に残りました。「名前は時間なしの約定に即した有意味な音声(*phōnē sēmantikē*)である。・・「約定(*to kata sunthēkēn*)とはいかなる名前も自然によってあるのではないが、[何かの]シンボル(代理)となる時、名前となるということである・・。動詞は時間を加えて意味表示し、例えば「健康」は名前であるが「健康である」は動詞である、というのも今内属していることを意味表示しているからである。・・動詞はそれ自身で発話されるときひとつの名前でありそして何かを意味表示する(なぜなら話者はひとつの思考を提示し、聴者はそれを保持するから)、しかし、それはまだ在るか在らぬかを意味表示していない。というのも、「在る」、「在らぬ」双方ともものごとの記号ではないからであり[約定ではなく、発見のことがらである]、たとえ「在る」それ自身を自らに即して裸で語ってもそうではないからである。というのも、かたやそれ自身何もものでもなく、他方共に置かれるものどもなしにその知を得ることがないところの或る結合を加えて意味表示するからである」(p.8)。「定義は「何であるか」の言表であると語られるので、「名前や名前のような他の言表は何を意味表示するか」の或る言表(*tis logos*)が定義となるであろう(*estai*)こと明らかである。例えば、「三角形」が「何を意味表示するか」は、それが三角形である限りにおいて、「何であるか」である。まさにそのもの[「三角形」により意味表示されるもの]が存在することを把握することによって、われらはそれが何故にそれであるかを探求する。その存在をわれらが知らないものごとに関して、それ[当該の名前が意味表示するもの]をこの仕方ですべて「何であるか」の言表として容認すること(*labein*)は困難である。困難さの理由は既に[92b19-25]語られたが、われらは在るか在らぬかを付帯的にという仕方においてしか知らないからである」(93b29-35) (93b31: '*to ti sēmainei, ti esti hē trigōnon*' (Bekker))。「容認すること(*labein*)」(b32)については「幾何学者は「三角形」が何を意味表示するかを容認した(*elabein*)」が、彼はそれが存在することを証明する」参照(92b15-17:cf.76a33,76b7,71a12)) (p.10)。この箇所のすぐ後で千葉先生は「ものごと F の存在の発見には程度があり、(F がある)存在だけが発見されることはなく、その「付帯的属性」或いは「自体的属性」と共に発見され、それを通じて、第三段階において、Fを一なるものたらしめている根拠としての「本質」即ち「何であるか」の一つであり最も厳しい条件を満たす「何であったか」のロゴスが発見され、学的知識が得られる(93a24-28)」(p.10)、また少し前の箇所でも「「在ること」の把握とはものごと F の属性を伴った存在(F があること)の発見的認識のことである」(p.7)と記しています。これらのご説明から、「他方共に置かれるものどもなしにその知を得ることがないところの或る結合を加えて意味表示する」(p.8)の「共に置かれるものども」とは、その「ものども」が加えられることによって、そこで意味表示されている F の何であるかをその属性と共に明らかにするものと理解したのですが、よいでしょうか。

このことからの連想で、「イエス・キリストの信」の「信」は、イエス・キリストとは何であるかをその属性(神の子であること)と共に明らかにする「共に置かれるもの」なのではないかと思いました。ローマ書 3:21-26 の福音「神の義はイエス・キリストの信を媒介にして信じる者すべてに明らかにされて

しまっている」という言表は、言いかえれば「イエス・キリストとは何であるか」を意味表示していると言えますでしょうか。人はその言表を理解し信じることでそれを把握、容認し、その事柄に基づいて生きることで「イエス・キリストが何であったか」を探求する、その発見的探求の過程が 5 章以降のエルゴン D の言語網において、一人称が用いられつつイエス・キリストの出来事を探求者に結び付ける聖霊の働きとして語られている、このように考えたくくなりました。しかし探求の対象は未知者でありイエス・キリストを現臨の座として差し出された神というべきなのではないかとも思います。「わたしが既に得た或いは既に完全になったということではなく、わたしもまたキリストによって掴まえられたところのものうえで (*ep̄ h̄ ō(j)*)、わたしもまたはたして掴まえるかどうか追い求めている」(Phil.3:12,「身代わりの愛の力能」より)。復活のキリストを眼前に見たことで教授者また探求者に変えられたパウロは、ローマ書を読む人に神の探求者となるように促しているのではないかと、そのような思いに駆られています。

*千葉恵「アリストテレスの意味論—既知および道なものごとを包括する—」『MORALIA』(東北大学倫理学研究会)第 28 号 2021 年 pp.3-28 (東北大学倫理学研究会)

『信の哲学』刊行途上の井村直道氏と上沼昌雄先生からのコメント

井村直道氏コメント

2016年12月30日

・・・(計画としては、仕事始めまでに第二部まで読み進め、1月中には第三部全てを読み切るように進めてまいる所存です)。それにしても、信の哲学が助成金に採択されたということで、大変おめでとうございます。先生自身もおっしゃているように、この一年は決して無駄なのではなく、内容に磨きをかけるためには、好機だったのではないかとお見受けいたします。実際、冒頭の百ページだけでもその内容・筆致は圧巻でございました。

先生がご自身ライフワークと位置付けるにふさわしく、先生のご研究の粋が込められていると十分に思わせる程の主張の密度と熱量と真剣さが字面から溢れています。読み進めると、まるで自分が学生に帰り、先生との在りし日の講義の続きを拝聴しているかのような錯覚と郷愁の念が湧いてきます。先生の意味論的研究は、あくまでロギコスであり、指示が実在を前提にしない浅いところで共約可能性を探ると標榜しておりますが、私にとっては私の実存・態勢を揺さぶる深さにまでその意味論は達しております。さて、以下に百ページまでで誤字・脱字ではないかと思う箇所を列挙させていただきます。確認いただければ幸いです。

2017年1月2日

・・・「信の哲学」ですが、p.160あたりまで読ませていただきました。

本著の理論的中枢のひとつロゴスアプローチとエルゴンアプローチが、完成・実働・力能の様相概念の分析を通じて、鮮明になり、突拍子なアプローチではないことを印象付けられました。またその中で形相・形姿、ゴール・目的、運動・変化等の常に混乱を招いてきた類似概念の諸差異が浮き彫りになっている点には脱帽してしまいます。これらの問題はそれだけで、一つの論文に値するほどの問題群ばかりだと思うからです。個人的には、修士論文のテーマだった自然目的論において様相論に訴えることができれば、どんなに明晰に語れたかとしみじみ思います。

1月16日

さて、信の哲学ですが、3.21-26までの「神の義」と「イエス・キリストの信」の間の分離のなさが大変、スリリングに説得的に記されておりました。パウロが何を伝えようとしていたのか、2千年の時を経てようやく解明され、私とその読者となっていることに不思議な巡り合わせを感じます。読み進めていく中で、私が神によって業と信のどちらの律法の側に従っているみなされているのかということも気になってしまいました。

その他A,B,Cの言語層の抽出により、「律法」が業、信のいずれのものなのか、あるいは「信」がひとのか、イエスのか、あるいはイエス・キリストのか等の解釈上の問題に明快な回答を与え、今後多くの読者を誤読より救うのだと信じています。なお、途中までですが、気づいた点を記します。

・・・さて信の哲学ですが、三章の選択の自由と自発性の自由には驚かされました。

神の前において選択の自由とは迷いにすぎないということがよくわかりました。

「人間の決断」とそれが「聖霊を介して注がれる神の恩恵」と両立する時、

自由と必然性が両立しているとする指摘は美しい調停案です。

この選択に自らが与っているかどうかは恩恵への「感謝」として自らのパトスを観察することにより反省することができます。

また、四章におけるローマ書七章の分析では、下記の記述に、自らのうちに罪が巣食っていることをはっきりと自覚するに至りました。

「律法が「赦せ」といえば、罪は「そんなひどいやつは罰を受けるべきだ、それが正義だ」とささやく。さらに罪は「使徒がキリストの過去の死はお前の古い過去の自我の死でもあったと、また自らの

罪は担いえないものであり既に荷われたと言ったのか、そんなことはないお前はあのこと、このこと自らの過去を償わなければならない」と律法を立てに、新しい前向きな生はおめでたき健忘症だとし、古き自我に固執させ責め立てる。」

上記はどこかで聞いたような言葉だと思ったら、私が無意識に自他に適用させてしまっているものでした。日々競争にさらされ、結果を求められる厳しい中で、ひとは優劣の基準を定め、合致するものを称賛し、しないものを非難するものです。

しかし、神はもうそのような基準に自らを浸す必要はないとおっしゃられている。ああこれこそが恩恵による福音という名の、あの十字架によって打ち立てられた新世界の律法なのだと、つくづくほっとしました。問はその神の前の現実をいつも自分の現実として離さずにいられるかということなのでしょう。そこには、本文にあるヌースの刷新がいつも必要なのですが、先生の論文を読んでいると、いつも発見がございます。刷新とはそのことを言うのでしょうか。さて、第三章および第四章の途中までで気づいた点を下記に記します。

1月29日

カントとグールドをお送りくださり、誠にありがとうございます。グールドという人をこれまで存じていませんでしたが、あの重々しい印象のあったバッハが、一人の演奏者によってこれほどまでに軽やかになるものなののでしょうか。本当に驚きです。誠に優しく、暖かく、鍵盤一つ一つの音色が魂に寄り添い、目を閉じればまるで木漏れ日に包まれているようです。これから何度もお世話になると思います。

内容についてですが、最高の存在者についての、歴史上最高の知性たちによる精巧な議論が眼前に繰り広げられ、私の知性が嬉々としています。大学を卒業してまた学生時代のように知性の興奮を抑えられない機会を得るとは思いませんでした。

ガウニロによるアンセルムス批判等で質問したいことはいくつかございますが、今日はカントによるアンセルムス批判の途中で時間切れとなってしまいました。カントのコメントとあわせて、恐れ入りますが次回にさせていただきます。

2月6日

修正版をお送りいただきましてありがとうございます。改めて来週に感想を送らせていただきます。今週は、アンセルムスについて質問させていただければと存じます。

問。アンセルムスの神の存在証明に関する「より大きい」の意味についてアンセルムスは自身の証明において、「理解においてよりも、ものごとにおいてあるほうがより大きい」と主張しています。まずこれは自明なテーゼなののでしょうか。先生は形而上学的負荷を零にすべく、敢えて「偉大」と解釈されていませんが、その場合理解(大) <ものごと(大)を成立させる「大」とはいかなる意味における大なのでしょう。この大に明確な規定がないのであれば、「大」にかわる何か肯定的な形容詞を代入しても形式的に成立するのではないかと思えてしまいます(もちろん形而上学的な負荷は免れませんが)。

そして成立するとすれば、先生が存在者的として退けたガウニロの「失われた島」の例は間違いではないこととなります。もちろん、彼が最上級表現を用いている点は過失ですが、比較級の否定表現にて、「それよりも大なる島が考えられない島が理解において存在する」として、それが res においてあったほうがより大であり、必然的に存在すると主張できるとする推論はアンセルムスの推論同様に妥当かと思われます。もっとも、アンセルムスは「発見することはできない」として、あくまで ontic-ontlogical の枠組みの中でガウニロを批判しています。しかし、p489 を読む限りガウニロの論点はあくまで res (大) > intellectus (大) といその存在論的推論図式を神以外にも応用できるものではなかったのかという点にあるように思えます。

またカントの「百ターレルの議論」についても不十分であることが理解できました。彼は、アリストテレスのようにロゴスとエルゴンを区別しなかったため、事象性を可能性の範疇に留めて、「あること」がロゴスだけでなくエルゴン次元で成立するという存在論を構築することができなかった。それ

はエンテレケイアという媒概念について理解していなかったということにも起因するのでしょう。しかし、カントもさすがとどうか明晰でした。

アンセルムスの贖罪論については、ただただ美しく、首肯せざるを得ない、喜び以外の何ものでもありません。われわれの犯した罪について、全てを持ち合わせている神に返すことができるのは司法的・比量的正義の枠組み内での業ではなく、「真っ直ぐ」という信に基づく従順さのみであります。清々しき論旨です。

2月13日

ご返信ありがとうございます。この一週間で林君と増山さんと連絡を取りました。

林君は目的不明ですが次は北京大学だそうです。増山さんは帰国されて、いろいろ執筆に忙しそうです。また春ごろ二人と会えればと思っています。改善したという箇所については、時間がなかったため、次回に確認させてください。申し訳ありません。

今回は、八章と九章をお送りします。パウロの言語網が、カトリックとプロテスタントに和解をもたらし、ハイデガーの死への決意性が本来的実存へ向けて常に可能性に留まり、喜びではなく、不安の情態性に捕らわれているという不健全さを見事に炙り出していると思いました。

2月26日

ご無沙汰しております。昨日、先生からの郵便が届きました。故宮院の絵葉書も含めありがとうございました。先週は同伴者の一人の都合がつかなくなったため、みなかみの辺りで山スキーをしました。おかげさまで、大変リフレッシュされました。佐々木さんの件をはじめ、この二週間で皆様に進展があり、大変喜ばしいことです。

私としては、今回を以て信の哲学を一通り通読させて頂いたと言うことができるかと存じます。今回はこのような貴重な機会を与えてくださり、本当にありがとうございました。重要な古典ほど、人々はそこに何度も立ち返るものですが、頁を進めるにつれて、本書は私にとってそうしたかけがえのない書物の一つであることを確信するに至りました。人間の生にとってこれ以上重要な真理があるのかと思わせる内容であり、この思想は読む者のヌースを刷新し、変身させる力を有しています。その証拠に、福音を文字としてではなく、罪への勝利として、罪からの解放として、自分の前の現実として受け止めることができたのです。先生の言う「霊的な」業の律法が私の罪を炙り出し、信の律法への従順へと駆り立てました。福音は受動形にて到来しました。その時、汚れ無き新風が吹きました。支配からも被支配からも自由な場所が現れました。名誉や金銭や成功などの世俗的な価値の一切が無差異と化す、平安なるパトスが訪れました。本書に宿る聖霊を媒介した結果です。

個人的な傾向性を踏まえて申し上げますと、哲学を好む私は、どうしても猜疑心にあふれ、皮肉屋であり、一時期は哲学を続けることで人格的な破綻をきたすのではないかと思った時期もありました。理性の律法主義的な性格が、そうした傾向に一枚噛んでいることは先生の授業を通じてわかっていたのですが、それはリテラに留まっていた。どんなに気を付けていても、病気にならないと健康時がいかなる状態かを完全には判別できないように、エルゴン上脱してみないことには、自らが業の律法に即し続けていることすら気づかないものと思われま。 (もちろん、義認が明確に啓示されているわけではないですが) そのため、「幼子の信仰」が嘉されると聞いたとき、理性はわれわれを啓蒙するどころか、むしろ義認の文脈では盲目にするのではないかと疑ったほどです。もちろんそれは誤りであり、聖霊によって無害とされる限りにおいてその行使は認められるべきではないかと今では思います。理性は一方でコンピュータ的使用の文脈において、それ自身の明晰さがどこまでも追及されるべきものですが、他方で何かを識別する、また他人に対して知識を披瀝するという文脈において、信と義と罪との連関の中で正しくその使用の節度を定められる必要があるのではないのでしょうか。そうせねば、理性の運動は高ぶりとして罪の格好の餌食となるはず。

以上長々と失礼いたしました。年末のメールでも述べましたが、本書はそれを理解しようとする読者自身に本物の福音を授ける力と実存の参与を促す力を有しています。締め切りまで残り一か月ですが、本書が完成することを大変心待ちにしております。ラストスパートですが、どうか寒さとお体にお気をつけくださいませ。

井村直道

上沼昌雄先生コメント

2016年11月8日

昨日はお伺いすることができて大変光栄に思っています。

原稿のコピーをいただきうれしいやら申し訳ない思いになっています。「あとがき」を読み、先生の苦節の40年を感じ取ることができました。エジプトを出たイスラエルの民の40年の荒野での旅になるのでしょうか。今日はクラスで先生原稿のコピーを若い方々に見せましたら、歓声やら驚きの声を上げていました。所々開いて見ているのですが、後半の380頁以降で先生の鉛筆の書き込みがあつて校正の跡があることに気づき、その部分を先生は必要とされておられるのか、気になりましたのでメールをしています。どのようにしたらよろしいでしょうか。明日午後2時の列車で深川に向かう予定であります。

感謝とお伝えをと思ってメールを書きました。

11月20日

先生にお会いしてから、石狩の聖書学院で先生のローマ書3章22節の理解を紹介いたしました。また友人の牧師たちにも機会があるごとに紹介しています。一人の牧師は「神の義」と「イエス・キリストの信」に「分離がない」という理解に深く感銘していました。過ぎる水曜日にカリフォルニアではなくシカゴの長男宅に戻ってきました。家内もそこに滞在しています。昨晩は長男に先生のご意見を紹介しましたら、その implication はどのようになるのかと聞き返して来て、先生の「信の二相」を説明しました。分かったようです。そんなことで勝手に先生の研究成果を紹介しているのですが、そのことで二つのことを確認できればと思っています。

ひとつは、機会がありましたら、石狩の聖書学院で先生の講演の時を持つことを考えていただけるかということです。校長の鍛冶川利文牧師に紹介しましたら、そのようなことが可能であればということでした。小さな学校で交通費しか出せない状態ですが、御考慮いただければ幸いです。かつて大村晴雄先生が学生の集会や神学校で教えに来てくださったことを思い出しています。

もうひとつは、友人の牧師に頼まれて6,000字の原稿を書いています。「レヴィナスからN.T.ライトへ」という題で書いているのですが、ローマ書3章のことも絡んで来て、その関わりで先生のご意見を紹介できればと思っていますのですが、よろしいでしょうか。

先生原稿のコピーをいただいて来てよかったと思っています。御著書となるまでは引用等はありませんが、先生の研究成果を齧ることが許され、特権のように思っています。それが英訳されて欧米に逆輸入されることを願っています。いつかN.T.ライトに直接にお話しされる機会を願っています。続いての御研究の上に、出版の上に主の豊かな導きをお祈りいたします。出版のために祈りつつ。上沼

12月8日

この年になって、信仰と哲学のことを整理し直すと言ったら良いのか、考えなすことができ、私のうちには深い平安をいただいています。ただ整理し直すのをいい加減に終わらせないで、良い機会ですので噛み付いて行きたいと思います。先生の本の出版のこと、神の豊かな導きを祈っています。先生の健康も支えられて研究を全うされますようにと願います。良いクリスマスをお迎えください。感謝とともに。上沼

12月12日

ウイークリー瞑想

「イエス・キリストの信による」2016年12月12日(月)

今回札幌滞在の折り、北大の哲学科の研究室に千葉恵先生をお訪ねしました。札幌に行くたびにお邪魔だと思うのですがお伺いしています。今回は出版のために今までの研究をまとめた原稿が出来上がっていて見せてくださいました。今まで大学の紀要などで書かれてきたものの総集編です。その紀要の抜粋をいくつかいただいて読むことができました。しかしまとめたものは本になると1500頁なるという大著です。

本のタイトルは『信の哲学—使徒パウロはどこまで共約的か』なのですが、中心的にはローマ書3章21節から30節までの解釈のことで、特に22節の「イエス・キリストの信による」の捉え方によっているといえそうです。千葉恵先生は無教会の熱心な指導者なのですが、哲学者としてアリストテレス研究からローマ書研究へと展開しています。

実は2年前に北大のクラーク聖書研究会の50周年記念講演で、当時N.T.ライトの翻訳をしていたこともあって、そのローマ書3章22節の従来「イエス・キリストを信じる信仰による神の義」と対格として訳されているところを、「イエス・キリストの信仰」と主格に取ることがこの30年来欧米の聖書学者の間で理解されてきていると紹介しました。顧問をしてくださっている千葉先生が私のところに来てくださって、それこそ自分の研究テーマだと言ってくださったことがこの始まりでした。

千葉先生は、その属格の「の」は対格でも主格でもなく「帰属の属格」であって、キリストに本来属しているものであり、しかも「イエス・キリスト」という称号には行為主体には用いられていないと、熱く語ってくださいました。それ以外のことも語ってくださいましたが、うまく飲み込めなかったので、それ以来日本に行き札幌に行くたびに研究室に先生を訪ね、紀要の抜粋をいただき、先生の研究のおこぼれをいただけてきました。

先生が「帰属の属格」を取られているもう一つのポイントは、その「イエス・キリストの信・真実」と「神の義」には分離がないことだと言います。従来信じる者の間に「何の差別もありません」という箇所は、神の義とイエス・キリストの信・真実には「分離はありません」と取るべきで、23節以下はその説明をしていると説きます。革新的な理解です。

この二つの箇所の誤訳と誤解のゆえにそれ以来の2千年のキリスト教会は、ペラギウス論争、カトリックとプロテスタントと混乱を来し、争いをしてきたと言います。確かに従来の「イエス・キリストを信じる信仰による神の義」であると、神の義は私たちの信仰によるかのようになるし、実際に聖書理解にしても、牧会にしても神の義をいただくためにこちらの信仰心を整えることに汲々としてきまし

た。結局は人間中心の信仰なのです。多分信仰義認の問題点はこの点にあるのでしょう。N.T.ライトが信仰義認だけであれば結局は me and my salvation になってしまうということに当てはまりません。

神の義は神の側のことで、そこにイエス・キリストの信・真実が含まれていて、そのことを信じる者が義とされるのです。キリストの信と私たちの信仰とは異なった次元なのです。「信の二相」と千葉先生は呼んでいます。その信を「人間であることの全体の分析として普遍的次元において提示するか」に「信の哲学」が寄っているようです。

「信の哲学」のケース・スタディーのように千葉先生はアンセルムスの Cur Deus Homo を取り上げます。そしてさらに何とも興味深いのですがあのハイデガーの『存在と時間』をパウロのローマ書のルター主義的理解として説き明かしていることです。非本来性と本来性という実存理解がルターのパウロ理解からきているというのです。北大でハイデガーを嚙っていたことを思い出します。

さらに私たちに突きつけられているのは、来年には出て来るといわれている新改訳と新共同訳の新しい訳で「イエス・キリストの信」がどのように訳されているかです。従来のままの対格であれば、結局は私たちの信仰心のことに焦点が向いてしまいまた信仰心の確立のための聖書理解に終わってしまいます。それは堂々巡りの出口のない信仰なのです。

信仰をいただいて北大にはいって哲学を専攻し、今度はその北大で千葉恵先生を通して信仰と哲学のテーマを再確認する機会をいただいています。何という導きなのでしょう。先生は本原稿のコピーを持って帰るように勧めてくれました。2冊になっていていただいて良いのか躊躇したのですが、本になるまでは待てないのでいただいてきました。千葉先生の40年の苦闘とその成果を申し訳ないことに味わっています。また齧り付いています。上沼昌雄記

12月27日

出版の道が開かれたこと、おめでとうございます。何ともうれしいことです。それにしてもその原稿をいただいたことを同時に感謝しています。先生のライフワークのおこぼれをいただいています。今まで何となく不明であったローマ書理解と神学の視点に方向性をいただいています。原稿を私が一生懸命に読んでいたので妻が関心を持って見ているので、できるところで先生の視点を説明しています。そして納得しています。妻は日本の宣教師の子弟で日本語がわかりますので先生のメールを読んで、先生の人柄を理解しています。これから出版に向けて原稿の推敲と校正と骨身を削るような作業が続きますが、新しい年先生の健康が守られて完成されることをお祈りいたします。鍛冶川先生とも連絡が取れ、2月2日に講義されること、うれしいことです。宣伝をいたします。今年最後の「ウイークリー瞑想」でローマ書1章17節の「信仰から信仰へ」をライト先生と千葉先生の理解を紹介しながら書きました。一両日に発信したいと思っています。私たちの子どもたちの二家族はシカゴ郊外に、次女は首都ワシントン郊外に住んでいます。私たちは北カリフォルニアに住んでいます。この時期雨が降り時々雪も降りますが、それ以外は晴れ上がっています。静かな時を過ごしています。先生ご家族にとりまして良い年末年始をお迎えください。感謝とともに。上沼昌雄

ウイークリー瞑想

「信仰から信仰へ」2016年12月27日(火)

この年もまもなく終わろうとしています。その前に「信仰」のことで整理しておきたいことがあります。信仰の励ましとしてただひたすら信じ続け、信仰に励んでいく姿として「信仰から信仰へ」とよく言われ、自分自身にも言い続けてきたことがあります。その箇所として神の義が「信仰に始まり信仰に進ませる」(新改訳)というローマ書 1 章 17 節が使われます。「それは、初めから終わりまで信仰を通して実現されるのです」(新共同訳)とも訳されます。

どうしてもこの「信仰から信仰へ」の両方ともが私たちの信仰のことで、その意味で「初めから終わりまで」何としても自分の信仰を堅く保ち、確立していくことだと思ってしまう。「信仰の確立」と暗黙の内に自分を励まし、他の人を励ますことが牧会のあり方のように思ってきたところがあります。そのために聖書を読み、祈りをし、教会生活を確立することがクリスチャンの生き方のようなところがあります。信仰形態を確立してそれを守ることに終始してしまいます。

義弟の結婚式が12月の初めにサンディエゴの動物園でありました。従兄弟たちが多く参加してくれました。私たちと同じような年頃です。その多くが親の信仰形態から離れています。意識的に反発しているところもあります。信仰の継承が信仰形態の継承になってしまっていたら、結果的にそうなってしまうのだらうと思わされます。同じことが当然日本でも起こっています。

しかし、『クリスチャンであるとは』の翻訳で取り組んだ N.T.ライト先生と「信の哲学」を提唱している千葉恵先生は共に、この「信仰から信仰へ」の「信仰」のギリシャ語ピステイスに faithfulness, 「信実」の意味があることに注目しています。ローマ書 3 章 3 節に「神のピステイス」とあります。「神の信仰」とは訳せません。神の faithfulness です。新改訳で「神の真実」、新共同訳で「神の誠実」です。千葉先生は「神の信実」と訳します。

この「神のピステイス」に対応して 3 章 22 節で「イエス・キリストのピステイス」が使われています。すなわち、「イエス・キリストの faithfulness, 信実」で、それに基づいて神の義が「すべて信じる人に与えられ」と続くこととなります。ピステイスの意味が二段階になっていることに注目しています。神とイエス・キリストの信実と、それを信じる私たちの信実さです。この二段階の意味合いがライト先生も千葉先生も「信仰から信仰へ」の理解に対応するとみています。ライト先生 ‘from (God’s) faithfulness to (human) faithfulness’ と訳し、千葉先生は「[神の]信に基づき、信に対して」と訳しています。

これだけの違いと言えればそれまでなのですが、ただ「初めから終わり」自分の信仰のこととして頑張る必要はないのです。神の faithfulness・信実に信頼して信じていくだけでよいのです。フォーカスが自分の信仰のことから神の信実に向かうのです。それはしかし、大きなことかも知れません。それこそまた、大変なことかも知れません。自分の信仰の心の動きとは関係なしにことをなされる神への信頼が求められるからです。でも考えてみればそれこそ信仰なのかも知れません。心が落胆してもなお信頼していく信仰になるからです。パウロがローマ書 3 章と 4 章で言っていることはそのことなのでしょう。

このことを千葉先生の原稿を読みながら、ライト先生のローマ書理解を参照しながら教えられたこ

とで、この年が終わる前に整理しておきたかったのです。信仰の視点が自分ではなく、神とイエス・キリストの信実さに向けられたら自分からも解放され、自由を味わえるのではないかと思います。

新しい年には、ライト先生と千葉先生が主張されている視点を、テキストに沿って少しでも傍証する作業をミニストーリーで取り上げたいと願っています。そのためにテキストを基にした勉強会のようなものを持てればと思います。新しい年もよろしく願いいたします。

上沼昌雄記

1月4日

新年おめでとうございます。本年もよろしく願いいたします。

第四章のことでウイークリー瞑想を書きました。先生の意図を正確に伝えているのか不安があるのですが、読んだ証として書きました。それにしても第四章も圧巻でした。どのように消化したら良いのかためらっているところもあります。ただローマ書8章までの動きが明瞭になりました。いろいろな注解書を読んでも不明というか、曖昧のままであった理由が分かったように思います。神学には自己欺瞞のようなものがあるのでしょうか。「信以前の理解」も少し飲み込めて来ました。本年は本の出版に向けての大仕事があります。完成のためにお祈りいたします。先生の御健康も守られますように。

お忙しいなかですので返信は無用です。感謝とともに。上沼

1月28日

先生の原稿読みは7章に入ったのですが、ローマ書のことが気になって振り返っています。解釈学的循環の一つの例なのかもしれませんが、1章28節の新改訳聖書の訳に引っかかっています。先生の訳ですと「ヌースの機能不全」なのですが、新改訳では「良くない思い」になっています。新共同訳では「無価値な思い」です。ここは24節で「汚れに引き渡され」、26節で「恥ずべき情欲に引き渡され」とあって、28節で「良くない思いに引き渡され」と繰り返されているので、初めから道徳的な意味でとっていることが分かります。しかし28節のはじめの「また、彼らが神を知ろうとしないので」の文章に「識別する」と訳される dokimazo が含まれていて、ここでは単なる道徳的文面ではなく、神の認知的意味を取り扱っていることが分かります。その dokimazo の dokimos の否定形の adokimos がヌースの adokimos として使われていることが分かりました。「ヌースの識別不能」とも訳せるのでしょうか。また先生の説明から1章20節で「ヌースにおいて」知られるとあることが分かりました。ヌースと「識別する」が平行して使われているのがさらに12章の2節の「わきまえ知るために、ヌースの心」であることにも気づきました。ヌースのことは私なりに気になっていたことですが、今回ヌースの識別能力を認めて理解することで、特にローマ書1章の意味合いが浮かび上がってきました。「良くない思い」では単なる道徳的な意味合いでしか捉えられないので、「良い思い」を持つことに心がけることで終わってしまうのだと思います。

さらに1章28節で N.T.Wright が次のように訳しています。Moreover, just as they did not see fit to hold on to knowledge of God, God gave them up to an unfit mind, so that they would behave

inappropriately.「識別する」に fit を使い、ヌースの「識別不能」に unfit を使っています。先生の記述の中にヌースの機能として「ヒットする」という表現が使われていることに関わるのかと思って確認したく思いました。「しかし、パウロが主張するヌース(叡知)という認識機能は、「ヌースの刷新」が常に必要とされるものとして、対象にヒットした場合だけ発動するそのようなものであり、それ自身としては偽の可能性がなく、ヒットしない場合は無知の状態が続くそのような認識論のもとに記述している。」(原稿 390 頁)何度かこの「ヒットする」がヌースの識別機能のように使われていて、N.T.Wright も同様に使っているようで、お忙しい先生を煩わすのは心苦しいのですが、一度お聞きしたかったので書きました。感謝とともに。上沼

千葉応答

昨日金曜日発送の手続きをしました。無事到着しますように。さて、お尋ねの件とても重要だと思えます。私もテキストそのものに導かれ「比例性テーゼ」を主張するようになりまして。そうすると聖書のいたるところに対応箇所を見つけることができ、これでよいのだと思っております。まず、1:18-31 は生身のわれわれではなくB次元にいる神の前の人間について神がどのように認識し、また怒りを啓示しているかの報告です。28節の adokimon は形容詞なので、「識別できない叡知」と訳さねばならないかもしれませんが、思い切って「叡知の機能不全」と訳しました。その実質は神の前において「神の義の要求を知っている」者たちが神に挑んでいる状況です(1:31)。神の善性を知ることはできずに、峻厳や怒りなど神の否定的側面のみを知ることができます。彼らのこの状態が機能不全に引き渡されている実質です。神の前にながら、神に反抗するひとたちはやはり認知状態がおかしいと言うしかないと思います。Wright が just as と訳している原語は *hutos* です。単に *hutos..hosper* ではなく認知状態の程度を読まねばならないと思います。「知識において神を持つことを識別しなかったほどに」という意味だと思えます。過去形が使われているのは、そのモデルがあり、それはモーセが十戒をもって山から下りてきた状況です(Ex32)。「三千人」が神の前で殺されたとあります。この啓示の媒介を機にロゴス次元で普遍化が許容されています。タレントを土に隠す譬えも神についての一面的な認識のもとにある人間のことが描かれています。叡知が正しくヒットしたときにはイエス・キリストの信を媒介にして神を知りますので、神の愛など肯定的な面を知ることができます。僻むものには神も僻む者となります。従いまして、叡知がヒットした後に命題により神についての識別が提示されます。「神は愛である」等。少しでもお役に立ち得ればと思います。肉の弱さを抱えているわれわれにはとても理解が難しいことがらですが、パウロは確実に神について知識主張をしています。カントやヒエロニムスの誤訳以来疲弊したヨーロッパの知性のなかで「理性」の「純化」を試みたため、知識の稼動域を「縮減」せざるをえませんでした。パウロははるかにアリストテリアンでした。とりあえず応答とさせていただきます。お元氣にお過ごしになられますように。嵐があまりひどくなりませんように。千葉恵

ウイークリー瞑想

「良くない思いに引き渡され」2017年2月2日(木)

「また、彼らが神を知ろうとしないので、神は彼らを良くない思いに引き渡され」(ローマ書 1章28節)は、その前に24節で「それゆえ、神は、彼らとその心の欲望のままに汚れに引き渡され」、26節で「こういうわけで、神は彼らを恥ずべき情欲に引き渡され」に続いて言われている箇所です。おそらく前の二つの節に引きずられて「良くない思い」と道徳的な意味で解釈され、訳されているのだと思います。

千葉教授のローマ書の意味論的分析に接していて、多少その意味合いが飲み込めてきました。それは、そこで使われている言語の意味合いに沿って意味を捉えていくことのようにです。その具体的な例がこの「良くない思い」の理解に見ることが出来ます。なるべく文字通りに「叡知の機能不全」と訳されて、その意味を明確にしようとしています。それで「良くない思い」と「叡知の機能不全」では同じ原語の訳語としては意味合いが異なっているので、どうしてこれほど違ってくるのか、それなりの格闘をすることになりました。

ひとつ分かったことは、この「良くない思い」のまえに、「彼らが神を知ろうとしないので」とあるのですが、「知識において神を持つことを識別しなかったほどに」と文字通りに訳すことができ、この「識別しなかった」の形容詞形がそのまま「良くない思い」に使われていることが分かりました。それで「識別に至らない叡知」「識別しえない叡知」ととることができることです。

「思い」「叡知」と訳される「ヌース」は、新改訳聖書では、「心」「知性」とも訳されています。このヌースは「識別する」という機能と並行して使われています。「心(ヌース)の一新によって自分を変えなさい」(12:2)でもそのまえで、「何が良いことで、神に受け入れられ、完全であるかをわきまを知るために」とあって、その「わきまを知る」「識別する」ためのヌースの一新になるのです。単なる感情・感覚の場としての心ではなく、責任を持って識別していく機能のことを述べていることが分かります。

「弁解の余地はないのです」(1:20, 2:1)という宣言がその前後に使われています。特にその前の使われ方ではさらに神から与えられたヌースの責任を述べています。神の見えない本性、永遠の力と神性は創造の時から「被造物によって知られ」と一般的に書いてあるのですが、その「知られ」には千葉訳のように「叡知において知られ」と、その意味合いが明確にされています。それはおそらく、神に造られた人すべてが心のどこかに神のことを識別するヌースが与えられているのにもかかわらず、それを行使しない責任が問われているのです。「彼らには」とあえて三人称で言われているのは意味論的に、まさに「弁解の余地のない」ほどに誰にも問われているからです。

ローマ書1章の後半を読むときにどうしても道徳的な意味合いだけでとってしまいます。道徳的に自分を整えることだけが主眼になります。しかし、その前に神に関する認知的な意味合いが語られていて、しかもそれはすべてに人に問われていて、その責任を行使しない人には神の怒りが、神の義の現れとして啓示されていることが分かります。弁解の余地のないほどに明らかだとパウロは宣言しているのです。それが神のことを識別しない人類の歴史だからです。

そのように読むと今度は、3章21節以下で、神の義の啓示がイエス・キリストの信・信実を通して直接に語られていて、それがもう一つの神の歴史であることが浮かび上がってきます。1章の後半

からは神に背いたイスラエルの歴史が全人類の歴史として語られていて、3章21節以降から回復の歴史が「すべて信じる人」の歴史として展開しているようです。千葉教授が主張されるローマ書の意味論的分析が、神の啓示の歴史理解をより明確にしてくれます。その歴史理解の上で神の子としての責任が、なおこの変動の時代に問われてきます。日々現実的になってきています。上沼昌雄記

お忙しい中、私の意味不明な問いに親切に答えてくださり、恐縮に思います。私にとってはローマ書1章の意味がより鮮明になりました。「叡知の機能不全」「識別できない叡知」のことで、それは「知識において神を持つことを識別しなかったほどに」と訳されるように認知状態のことが記されていることで、単なる道徳的なことではなくて、ヌースをいただいているものとしての責任に関わることが明らかになります。ただ私たちの間に使われている新改訳聖書の「良くない思い」で読んでいる人たちに、この認知状態をどのように説明したら良いのかとも思われています。B次元での啓示の神における自己完結性を意味論として捉えることを少しでも説明できればと願っています。A次元でのことと平行して説明できるかもしれません。過去形で書かれていることで出エジプト32章をモデルと記していただきましたが、Wright がローマ書を出エジプトを背景に読むことを勧めていることを思い出しました。律法のこと、また6章の「奴隷」をエジプトでの奴隷状態と結びつけています。「カントやヒエロニムスの誤訳以来疲弊したヨーロッパの知性」この表現、なるほどと思います。それはバルトのような神学にも及んでいます。私なりに神学をして来て、ある時点で神学の自己偽善性／自己欺瞞性のようなものを感じたのを思い出します。前回の続きで確認したいことは、「叡知が正しくヒットしたときには」を「叡知が正しく識別したときには」ととってもよろしいのでしょうか。お忙しい中先生を煩わすこと、申し訳なく思います。同時に2月14、15日の石狩の聖書学院での講義のために祈っています。何人かの牧師に紹介していますが、参加されるかどうかは不明です。この数日カリフォルニアの太陽が出て来ています。先生もお元気で過ごしてください。感謝とともに。上沼

2月3日

お忙しい中、ご返事を感謝いたします。更なる改善に先生の熱い思いを感じております。あと数十日の格闘、最後まで守られよき原稿に仕上がることをお祈りいたします。いただいた説明表の解説をしています。今回のウイークリー瞑想に関して、一人の牧師より以下の文面をいただきました。この牧師は私たちの間ではかなり前から「イエス・キリストの信」を主格ととっていました。2年前に千葉先生の「帰属の属格」のことを説明しました。それ以来考えていたようです。「いつも、ウイークリー瞑想をありがとうございます。今回の「良くない思いに引き渡され」は、共感に満ちたものでした。以前から千葉先生の「キリストの信実」についてお教えいただき、思索の範囲が広げられてきたことを感謝しています。

以前にお話ししていました拙著『わかるとかわる！《神のかたち》の福音』（432頁）が、やっといのちのことば社から出版されました。そこでも千葉先生の解釈も含めて論じることができました。」

この5月半ばから6月に日本を予定しています。その間今のところ二つの牧師セミナーで先生のロ

一マ書理解を下に会合を持つことができそうです。その折りにも札幌に伺えればと願っています。
感謝とともに。上沼 2017.2.3

2月15日

ご報告をありがとうございます。知人の中で誰かが参加してくれればと願っていましたが、旭川の竹本克己さんが参加してくれました。先生の講義に参加して以下のようなメールをくれました。「昨日、石狩の聖書学院で千葉恵教授にお会いして講義を受けてきました。「信の哲学」に至る壮大な研究の対象とローマ書が持つ意義の深さを熱く語ってくださいました。私が今日は、仕事で講義を聴けないことをお伝えすると、講義内容が書かれている「第八節 神の予定と人間の自由のパウロ的両立可能性」の原稿をくださいました。家に帰ってから、北大の論文検索をしてみると千葉教授の論文が見つかりこれから始まる旅に出かけるような興奮を感じました。上沼先生が以前からローマ 3:22 について語ってください、千葉教授を紹介してください千葉教授の研究に出会えたことを心より感謝します。どこまで理解できるかわかりませんが勉強を続けたいと思います。」

2月24日

ウイークリー瞑想

『平気でうそをつく人たち』という本 2017年2月23日(木)

昨年来メディアを通して耳にするニュースとそれに対する反応をそれなりに聞いて、この『平気でうそをつく人たち』という本のことを思い出します。1983年にアメリカで出版され、日本では1996年に翻訳出版されました。現在は文庫本にもなっています。この本のことを思い出させられるのは、気持ちのいいものではありません。平気でうそをつくことが当たり前の時代になってしまったかのようです。うそでも事実でもどちらでもいいのだというささやきまで聞こえます。

自分の非を認めることを絶対に拒否し、それを認めるなら死んだほうがましだと思い、その責任を他に転嫁することに関しては悪魔的な知恵を持っていると、著者のスコット・ペックは言います。しかもそのような人は身近にいるのだと、自身の精神科医としての経験から語ります。何と最後までひとりの患者にだまされたと言うことです。このような人は自己批判に耐えられないので、失敗したときには、敵を見つけ出し攻撃することで責任逃れをしようと言います。

この邪悪性が悪の根源と見ています。その精神構造は怠惰とナルシズムです。自分の邪悪性を認めるよりもスケープゴートを探します。それが集団になったのがナチス・ドイツのことと言います。ホロコーストのあとにレヴィナスが「他者」を視点に哲学を始めたのが分かります。

千葉教授のローマ書研究は、類をみないほどの言語分析をしています。「ローマ書」が語っている言語の意味論的分析に終始しています。釈義を徹底しているだけで、適用は考えないで、テキストそのものに語らせていると言えます。そうすることで何となく抱いていた不明瞭さが除かれる面があります。

ローマ書 7章は「私」が出てきます。ナルシズムのことかと思わせるのですが、その「私」のうちに住みつく罪を見つめるのです。怠惰ではできないことです。他人への責任転嫁どころか、自分の

「内なる人」を避けないでじっと見つめます。7章は結婚における律法の役割を明確にすることで始まっています。すなわち、相手が生きている間は律法の権限が生きているが、キリストとともに死ぬことで律法から解放されている、それでもなお罪を認めないわけにいかないのです。その罪と律法との関わりで「私」はどうなっているのかと考えます。

7節と13節で、相手の論点に対して「絶対にそんなことはありません」という言い方で、二段構えで論が展開していると言います。「律法は罪なのか」、そうでないとすると「この良いものが死をもたらしたのか」に共に「否」をいうことで、実は「私」のなかに「神の律法」と「罪の律法」(21-25節)が共存していると認めるのです。律法は罪でない、しかし、「罪の律法」が私のうちにある、その現実を見つめているので「私は、本当にみじめな人間です」としか言えないのです。ナルシストどころではありません。怠惰ではできません。身を削るようなことです。

千葉教授はこの二段構えの論法において、後半が現在形であるに対して、前半が過去形で書かれていることに注目します。しかも律法と罪が擬人化されていることもあり、創世記3章の蛇の擬人化に対応し、「戒めによって機会を捕らえた罪が私を欺く」(11節)ことになったと見ます。その蛇が欺いたように、私たちのうちに「神はほんとうに言ったのか」(創世記3:1)という「罪の律法を立てる」と見えています。

それは「異なった律法」(23節)で、認めたくないが、認めなければさらに自分を欺くこととなります。そこには当然葛藤があります。8章での「うめき」です。しかしそれは御霊の内住によって「イエス・キリストの信」のゆえの「神の義」が少しでも御霊の実として結んでいくこととなります。そのようにパウロが論法を展開していることを明確にしています。それゆえに当時のユダヤ思想にもギリシャ思想にも「ローマ書」は耐えうるものと見えています。

もしかすると3章22節における安易な信仰義認の理解が、その後のパウロの論法に従うことを不可能にしてしまって、一面的な信仰者の理想像で生きることになり、思いを向けさせてしまったのかも知れません。怠惰とナルシズムは、その意味では、私たちの中に住みついてしまったかのようです。これはアメリカの教会が直面している問題と言えそうです。かつてドイツの教会がそうであったように。

上沼昌雄記

2月25日

ご丁寧な心温まる御礼をいただき、恐縮に思います。同時に大きな励ましをいただいています。ローマ書の意味論的分析の成果をいただきながら、今まで不明瞭であったローマ書の世界が私のなかで展開して来ています。私はおこぼれをいただいているのですが、少しでも仲間たちの分かってもらえればと願っています。彼らも意味不明瞭の中にいます。なかなか出てこようしないのですが、少しずつ共鳴をいただいているところです。原稿が書物になればさらに紹介しやすくなります。「集団で罪に欺かれる」との先生の表現で、それはこれからも起こりうることと思われました。原稿の完成のためにお祈りをいたします。こちらは今朝は少しの雪景色で目が覚めました。昼にはカルフォルニアの太陽で解けてしまいました。感謝とともに。上沼

『信の哲学』正誤表

2023年9月3日:『信の哲学』(北大出版会 2018)赤字直し

上巻

123:left8 それが魂の営みを統一する根源的態勢の探求を通じて信が魂の根源的態勢であることの論証を試み、 →魂の営みを統一する根源的態勢の探求を通じて、**信の哲学**は信が魂の根源的態勢であることの論証を試み、

238:3 metechon → **metechon** (イタリック)

357:3 名誉は徳の報酬→**崇拜**は徳の報酬

357:6 名誉でさえ小さなもの→**崇拜**でさえ小さなもの

357:left1 自らの名誉を自らの有徳さの→自らへの**崇拜**を自らの有徳さの

409:left4 第四巻二章→第**六**巻二章

495:機能している。[付加]例えば、「泳ぎ」という概念は「見ず」の理解なしに理解されないように、或る言明の真理を「信じる」という概念の理解なしに、その事態を「知る」ことはない。疑っている者は知ることができない。

531:12 計画に即して召された者たちには→**彼ら**は計画に即して召された者たちであって、

568:7 [Gal.2:18] もし彼が破壊したものども→もし**われ**が廃棄したものども

568:11 [Gal.2:20] われを愛し、わがために→われを愛し、**そして**わがために

626:11 diegriechische →die griechische

632:14[Phil.4:7] あらゆる点でヌース→あらゆるヌース

632:left9[Phil.1:10] 汝らの愛、→汝らの愛**が**、

754:8 *ge* →*gē* [長母音]

755:left8 受けないとこと → 受け**ないこと**は

806:5 (15:51)→(15:5**2**)

821:7 Isaiah 9 → Isaiah **11**

下巻

73:5 それよりも偉大なもの→それよりも**大きい**もの

111:7 百ターレルにおいてより多く→百ターレルにおいて、より多く

179:left4 [2Cor.7:10]苦悩は後悔なき悔い改めを働く→苦悩は後悔なき**救い**に至る悔い改めを働く

付録

463 上:14 (Rom.5:6) 好機に、不敬虔な者たちのために死んだからである。というのも、誰かひとが義人のために死ぬということはほとんどないからである。実際、或るひとは善き恩人のためにあえて死ぬことがあるかもしれない。しかし、キリストはわれらがまだ罪人であるときわれらのために死んだ、そのことにより神はご自身の愛をわれらに結びつけたのである。→**時満ちて**、不敬虔な者たちの**代わり**に死んだからである。なぜ[キリストの死が神の愛]かと言えば、或るひとは**かろうじて**義人

の代わりに死ぬかもしれない(というのも或るひとはもしかすると善き恩人の代わりにあえて死ぬことがあるかもしれないからである)が、八しかし、キリストはわれらがまだ罪人であるとき、われらの代わりに死んだことにより、神はご自身の愛を結びつけたからである。

463 下:9[Rom.5:11] 主イエス・キリストを介して神において→主イエス・キリストを介して神のうちで

466 上:14 [Rom.7:5]われらが肉→というのもわれらが肉

466:16 において働いた→において働いたからである

468 上:9 [Rom.8:3] その肉において→その[イエスの]肉において

469 下:5 [Rom.8:28] 計画に即して→彼らは計画に即して

469 下:5 召された者たちには→召された者たちであって、

文献目録

17:bottom9 Liddle → Liddell